

平成 24 年度
生物多様性の保全と活用による
国立公園活性化事業
(グリーンエキスパート)
「知床世界遺産地域における利用の適正化と
野生生物との共生推進事業」
報告書



8月8日に知床五湖高架木道の直下に現れたヒグマとそれを見る利用者

平成 25 年 3 月
環境省 釧路自然環境事務所
公益財団法人 知床財団

目次

概要.....	1
I. 野生生物との共生と適正利用に係わる保護管理業務および調査検討.....	3
1. ヒグマに関する安全対策に係わる現地管理および情報周知に係わる業務.....	3
2. ヒグマに関する情報収集.....	51
II. その他の自然保護業務補佐.....	59
1. 傷病鳥獣の保護.....	59
2. 知床国立公園内全般のパトロール.....	62

概要

1. 事業名（英名）

平成 24 年度生物多様性の保全と活用による国立公園活性化事業(グリーンエキスパート)
「知床世界遺産地域における利用の適正化と野生生物との共生推進事業」 報告書
(Report: The program for co-existence with wildlife and optimization of park use in
the Shiretoko Natural World Heritage site, 2012.)

2. 事業の背景・目的

本事業は、ヒグマに関する安全対策の検討・実施、自然保護上重要な地域への立ち入り状況調査等を通じて、知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区における利用の適正化と野生生物との共生を推進することを目的とする。

3. 事業の実施体制

本事業は、環境省からの請負事業として公益財団法人 知床財団が実施した。

4. 事業の手法・概要

(i) 野生生物との共生と適正利用に係わる保護管理業務および調査検討

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内において、ヒグマの出没状況の把握やヒグマ保護管理対策活動等を実施した。ヒグマ注意看板等を製作し、設置および撤去を行った。遊歩道など利用エリアでヒグマの出没状況に応じた情報周知を行った。ヒグマの生息状況の把握として、知床五湖から知床大橋間の道道知床公園線沿いにおいてヒグマの痕跡調査を実施した。また観光船から提供されたヒグマ目撃情報をまとめた。

(ii) 自然保護業務補佐

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内において、傷病鳥獣の保護収容や自然保護業務全般に関わる補助的活動等を実施した。

5. 事業結果

(i) 野生生物との共生と適正利用に係わる保護管理業務および調査検討

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内におけるヒグマ目撃件数は 1,982 件(斜里町側 1,702 件、羅臼町側 280 件)、ヒグマ保護管理対策活動の実施件数は 1,000 件(斜里町側 823 件、羅臼町側 177 件) となり、例年と比較してヒグマの出没が非常に多かった。

ヒグマによる人身事故は発生しなかったが、住宅の敷地やキャンプ場など人間の利

用エリア内にヒグマが侵入する事例や、不法投棄された生ゴミをヒグマが食べる事例、観光客がヒグマに餌を投げ与えるといった危険な状況が多数確認された。

ヒグマ注意看板を 15 基製作し、斜里町側に 12 基、羅臼町側に 3 基それぞれ設置して情報周知を行った。また登山道やフレペの遊歩道等ではヒグマの出没状況に応じて注意看板を設置した。

知床五湖から知床大橋間の道道公園線沿いにおいて、痕跡調査を 2 回実施し、計 13 箇所ではヒグマの足跡を確認した。

ウトロの観光船から平成 24 年 4～11 月の期間のヒグマ目撃情報の提供を受け、1,041 回の運航記録を集計した。観光船からのヒグマ目撃件数はのべ 2,389 件であった。

(ii) 自然保護業務補佐

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内における傷病鳥獣の保護収容は、19 種 33 件（斜里町側 13 種 18 件、羅臼町側 9 種 15 件）であった。希少種であるオオワシとオジロワシを保護した事例が 1 件ずつあり、いずれも環境省へ引き渡した。野生動物死体の処理対応件数は 11 種 38 件（斜里町側 9 種 33 件、羅臼町 4 種 5 件）であった。

公園利用者の不適切な行為に対する各種指導、外来種除去、ゴミ拾い等を随時実施した。希少動植物の不法採取などの具体的事例は確認されなかった。

I. 野生生物との共生と適正利用に係わる保護管理業務および調査検討

1. ヒグマに関する安全対策に係わる現地管理および情報周知に係わる業務

1-1. はじめに

本業務では、ヒグマと人との軋轢低減を目的として、知床におけるヒグマ出没状況の把握と各種のヒグマ対策活動を実施した。なお、本業務は斜里町および羅臼町からそれぞれ受託しているヒグマ対策業務（国立公園や鳥獣保護区の区域外も含む）とも連携して実施したため、本報告には本事業の契約期間外の情報も一部含んでいる。

1-2. 業務内容

① 実施範囲

知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区。なお、左記区域内の主要な地点名は、図 1-1 のとおりである。

② 業務実施期間

平成 24 年（2012 年）5 月 14 日から平成 25 年（2013 年）3 月 29 日

③ ヒグマ目撃情報の収集

ヒグマ出没状況は、斜里側においては観光客などによるヒグマ目撃情報をアンケート形式で随時収集することによって把握した（以下、アンケートとする）。羅臼側においては、国立公園区域外を含む町内全域のヒグマ出没に関する通報ルート（町役場経由、主に地元住民が目撃・通報）による情報提供が主体のため、アンケート以外にそれらも含めた。アンケート用紙（資料編 1-1）はヒグマを目撃した場所、日時、状況、および個体の特徴などを記入するもので、知床国立公園内にある主要な施設（知床自然センター、鳥獣保護区管理センター、知床世界遺産センター、知床五湖フィールドハウス、木下小屋、羅臼ビジターセンター、ルサ FH）に配置されている。アンケートは当財団の職員が電話や口頭でヒグマ目撃情報を入手した場合や、職員が偶然ヒグマを目撃した場合にも記録した。

収集した目撃情報は表 1-1 の地域区分に基づいて、地区別に集計した。なお斜里側のヒグマ観察を目的とした観光船による洋上からの目撃や、少数の漁業番屋しか存在しない斜里側の知床大橋から知床岬までの間で記録された人間との軋轢を伴わない目撃は、本集計から除外した。ヒグマの目撃は平成 24 年 4 月から始まったため、本報告書では平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月 20 日現在までに寄せられたアンケートを集計した。観光船からの目撃情報については項目 2-2 で説明する。

④ヒグマ対策活動

ヒグマの生態に関する専門知識や、手投げ式の大型花火（轟音玉）および猟銃の所持などに関する資格と技能を有する当財団の職員が、ローテーション方式でヒグマ対策を実施した。日常業務として、知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内のパトロール、電波発信機を装着したヒグマのモニタリング、知床五湖駐車場の周囲に設置された電気柵の点検や補修作業を実施し、ヒグマと公園利用者との軋轢低減に努めた。またパトロールや通報により、遊歩道や道路周辺にヒグマを誘引する可能性のある物が確認された場合は、町役場などの関係機関とも協力して回収や除去作業を行い、ヒグマの定着を未然に防ぐよう努めた。誘引物とはヒグマの餌となり得るシカ、トド、イルカ、およびクジラなどの大型動物の死体、不法投棄されたゴミ、アリやハチの巣などである。また釣り人やキャンパーに対し、食料やゴミの管理徹底を促す看板の設置やチラシの配布、口頭での指導を行った。ヒグマの誘引を防ぐためのこのような普及啓発活動は、日常のヒグマ対策パトロールや出没後の現場状況調査と併せて実施した。

さらにヒグマ出没の際には、追い払いや調査、問題個体に関しては有害鳥獣捕獲（以下、有害捕獲）などの対応を行った。特に知床五湖遊歩道やフレペの滝遊歩道に関しては、ヒグマの出没により安全な利用が困難と判断された場合には、遊歩道の一部または全体を閉鎖した上で対応を行った。なお対応実施にあたっては、目撃地点、時刻、目撃時のヒグマの行動などを総合的に考慮し、追い払いは散弾銃による威嚇弾（花火弾・ゴム弾）の発射、手投げ式の大型花火（轟音玉）などによって行った。

上記の各種対応についても、目撃情報と同様に地区別、対応区分別（表 1-2）に記録・集計し、平成 24 年 4 月から平成 25 年 3 月 20 日現在までに実施したものを集計した。

⑤ヒグマに関する情報周知

ヒグマ注意看板を 15 基製作し、斜里町内に 12 基、羅臼町内に 3 基それぞれ設置した。看板の内容、設置場所、設置期間については後項で詳述する。羅臼岳登山道、硫黄山登山道、フレペの滝遊歩道、羅臼湖歩道などの歩道入口にはヒグマ出没状況に応じて注意看板を設置した。また知床自然センター（<http://www.shiretoko.or.jp/>）や羅臼ビジターセンター（<http://rausu-vc.jp/>）のホームページを通じてヒグマ情報の発信を行った（サンプル画像 資料編 1-2）。

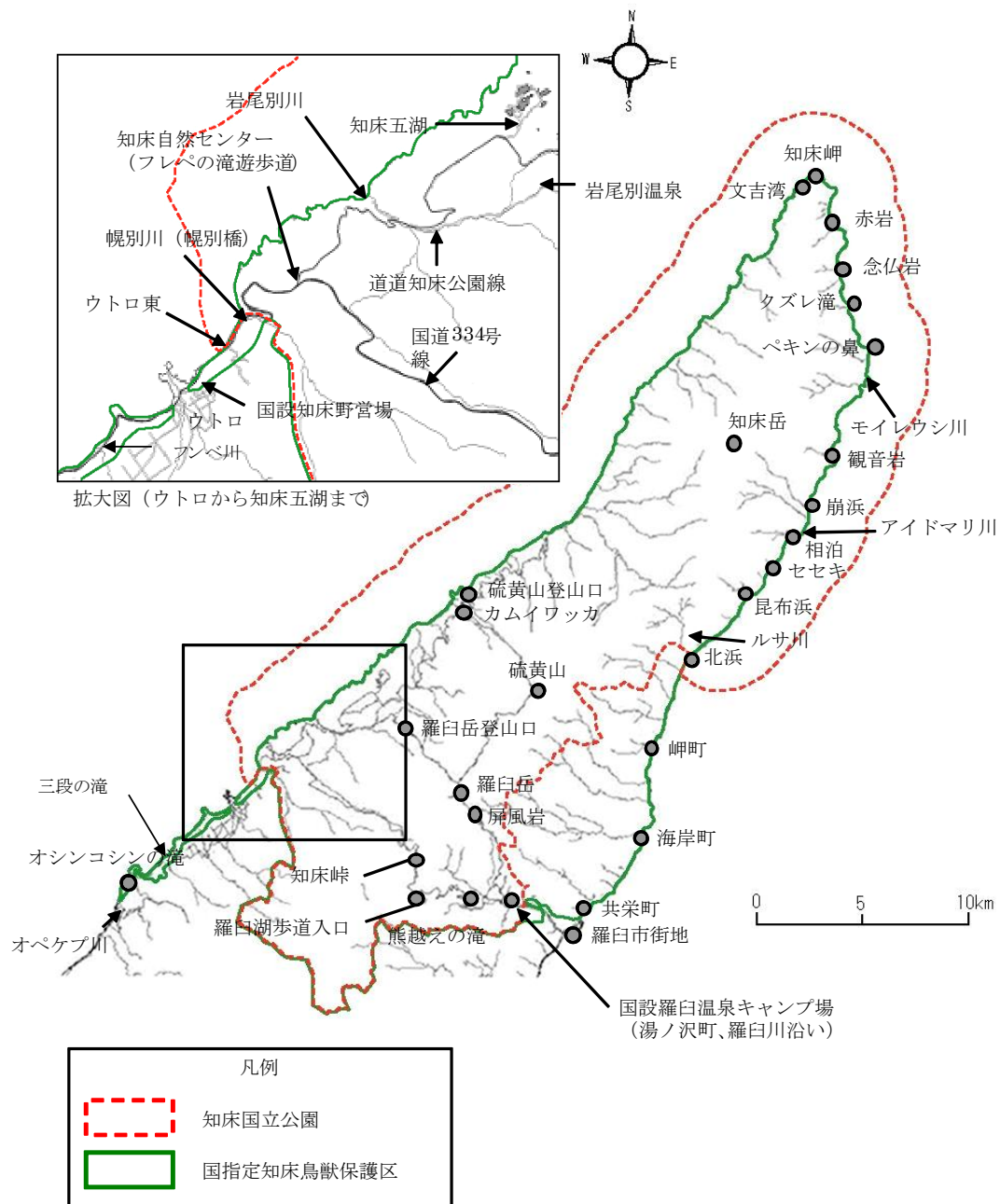


図 1-1. 知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区内の主要地点名

表 1-1. 知床国立公園および国指定知床鳥獣保護区における地域区分

斜 里 側	国立公園および 国指定知床鳥獣 保護区	幌別・岩尾別地区	国道 334 号線幌別橋から幌別園地を經由し道道知床公園線三峰橋に至るまでの道路沿いと町道岩尾別温泉道路沿い、町道五湖道路沿いおよびフレペの滝遊歩道沿い	
			岩尾別川沿い	岩尾別川河口から孵化場取り付け道路入り口に至るまでと町道岩尾別温泉道路で岩尾別温泉に至るまで道路沿い
			幌別川	幌別川河口部と幌別橋の上下流方向、それぞれ約 100m までの河川内と河畔林内
			フレペ遊歩道	フレペの滝遊歩道沿いおよび灯台管理道路沿い
			国道・道道沿い	国道 334 号線幌別橋から幌別園地に至る道路沿い、道道知床公園線幌別園地から三峰橋に至るまでの道路沿い
		知床五湖園地地区	知床五湖駐車場と知床五湖高架木道および知床五湖遊歩道沿い	
		イダシュベツ・カムイワッカ地区	道道知床公園線三峰橋から知床大橋に至るまでの道道沿い	
			カムイワッカ地区	道道公園線ミラーNo.5 から硫黄山登山道入り口までのカムイワッカ川沢内
		知床連山登山道地区	木下小屋登山口から羅臼岳、硫黄山を經由し硫黄山登山口に至るまでの登山道沿い	
		知床横断道地区	国道 334 号線幌別ゲートから知床峠に至るまでの国道沿い	
		知床岬地区	知床大橋から知床岬まで、文吉湾オコツク番屋周辺等	
		国指定 知床鳥獣保護区	幌別川ーオペケプ川地区	国立公園外の国指定知床鳥獣保護区で幌別川とオペケプ川に挟まれたエリア
羅 臼 側	国立公園および 国指定知床鳥獣 保護区	ルサー知床岬地区	道道知床公園・羅臼線沿いの北浜（ルサ川左岸）から知床岬までの地区	
		湯ノ沢町ー知床峠地区	国道 334 号線沿い湯ノ沢町温水プール前から知床峠までの地区 （羅臼湖歩道および羅臼岳登山道の羅臼温泉登山口から山頂までの区間も含む）	
	国指定 知床鳥獣保護区	羅臼市街地北側ー岬町地区	国立公園外の国指定知床鳥獣保護区で、道道知床公園・羅臼線沿いの羅臼市街地の船見町（羅臼川左岸側）から北浜（ルサ川右岸）までの地区。海岸、道路および民有地を含まない、町有林と国有林。	

表 1-2. ヒグマ対策活動区分

出 没 時 対 策	調査：	ヒグマ出没情報を受けて出動したが、特別な対応をする必要がなく、現地調査のみ実施したもの。
	威嚇・追い払い：	ヒグマ出没情報を受けて出動し、出没個体に対して威嚇・追い払い措置を実施したもの。
	有害捕獲：	ヒグマの出没通報を受けて出動し、問題個体の有害捕獲を行ったもの。
防 御 的 対 策	誘引物除去：	ヒグマが定着中、あるいは定着する可能性のある誘引物（シカや海獣類の死体、アリやハチの巣）の除去・回収を目的として出動したもの。
	クマ対策パトロール：	ヒグマ出没多発地点の巡視や遊歩道の定期パトロールを実施したもの。
	施設管理活動：	電気柵の設置や維持管理、ヒグマ注意看板の設置等施設の管理を目的としたもの。
	その他：	上記いずれにも該当しないヒグマ対策や対応。

1-3. 業務結果と考察

①ヒグマ出没状況

平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日現在までの期間中（以下、今年度）、知床国立公園（以下、国立公園）および国指定知床鳥獣保護区（以下、鳥獣保護区）におけるヒグマ目撃件数は、合計 1,982 件であり（表 1-3）、昨年度同期の 951 件より 1,031 件多かった。町別の目撃件数は、斜里町側が 1,702 件、羅臼町側が 280 件となり、両町とも昨年度と比較して大幅に多かった。同地域におけるヒグマ目撃件数は、北海道内の一地域としては突出しているが、今年度は例年と比較して顕著に多かった。斜里町側と羅臼町側におけるヒグマ出没状況を項目別にそれぞれ記載する。

表 1-3. 国立公園および鳥獣保護区における地区別・月別のヒグマ目撃件数

（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日）

地区区分	月												総計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
斜里側													
幌別・岩尾別地区	34	89	105	272	395	111	141	36	7	1	0	1	1,192 (+737)
知床五湖園地地区	1	4	33	93	45	11	9	2	0	0	0	0	198 (+140)
イダシュベツ・カムイワッカ地区	0	0	29	37	13	3	3	0	0	0	0	0	85 (-5)
知床連山登山道地区	0	0	5	18	19	13	1	0	0	0	0	0	56 (-4)
知床横断道地区	0	0	13	12	9	7	1	0	0	0	0	0	42 (+9)
知床岬地区	0	0	1	1	1	0	0	1	0	0	0	0	4 (-9)
幌別川ーオペケプ川地区	0	10	27	6	5	41	16	5	15	0	0	0	125 (+75)
小計	35	103	213	439	487	186	171	44	22	1	0	1	1,702 (+943)
羅臼側													
ルサー知床岬地区	1	8	6	24	48	25	0	0	0	0	0	0	112 (+7)
湯ノ沢町ー知床岬地区	0	3	13	12	9	1	1	0	0	0	0	0	39 (+12)
羅臼市街地北側ー岬町地区	4	30	12	22	43	18	0	0	0	0	0	0	129 (+69)
小計	5	41	31	58	100	44	1	0	0	0	0	0	280 (+88)
総計	40	144	244	497	587	230	172	44	22	1	0	1	1,982 (+1,031)

※ () 内は昨年度との比較

<斜里側>

斜里側の国立公園および鳥獣保護区におけるヒグマ目撃件数は、合計 1,702 件であり、昨年度の 759 件より 943 件多かった（表 1-3）。斜里側の目撃件数は過去 5 年間において 500～700 件程度で推移していたが、今年度の目撃件数は例年の 2 倍以上となり、また過去最多記録となった。

月別の目撃件数は、8 月に最多の 487 件となり、次いで 7 月が 439 件となった（図 1-2）。例年は 7 月が最多となり 8 月は減少する傾向が見られるが、今年度の 8 月は昨年 82 件の約 6 倍となった。

目撃件数を地区別に集計すると、幌別・岩尾別地区が最も多く 1,192 件、次いで知床五湖園地地区が 198 件、幌別川ーオペケプ川地区が 125 件と続いた。この 3 地区は特に昨年度と比較して目撃件数が多かった。幌別・岩尾別地区では 737 件、知床五湖園地地区では 140 件、幌別川ーオペケプ川地区では 75 件、昨年度よりそれぞれ多かった。目撃件数が

多かった要因については別項目で詳述する。

今年度においてもヒグマによる人身事故は発生していないが、危険なヒグマの出没や遭遇事例が複数回確認された。国立公園内では人を恐れずに道路沿いや施設付近に出没するヒグマが頻繁に目撃され、公園利用者とヒグマが近距離で遭遇しやすい状況が発生した。そのような中で、公園利用者がヒグマに餌を投げ与える事例や、道路沿いに不法投棄された生ゴミをヒグマが食べる事例、ヒグマに接近しすぎた観光客が威嚇され驚いて転倒し軽傷を負う事例などが確認された。

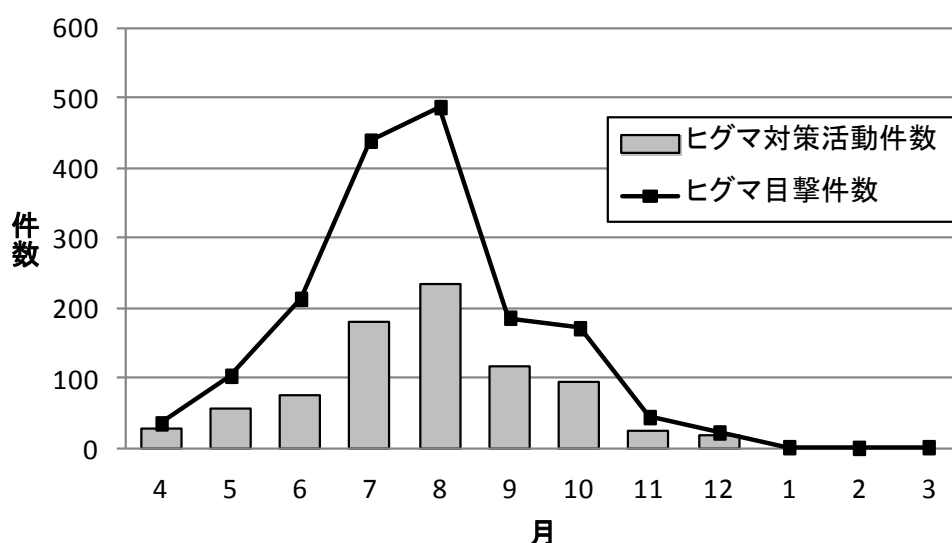


図 1-2. 斜里側におけるヒグマ目撃件数とヒグマ対策活動件数の月別推移
(平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日)

< 羅臼側 >

羅臼側の国立公園および鳥獣保護区におけるヒグマ目撃件数は、合計 280 件であり、昨年度の 192 件より大幅に増加した。

月別の目撃件数は、8 月が最多で 100 件となった(図 1-3)。目撃件数が羅臼側で最も多かった地区は羅臼市街地北側一岬町地区の鳥獣保護区内で、129 件の目撃があり、昨年度の 60 件から倍以上の増加となった。一方、昨年度最多の目撃があったルサー知床岬地区は 112 件で、昨年度の 105 件と比較して僅かな増加に留まった。湯ノ沢町一知床岬地区での目撃は 39 件(羅臼岳登山道の羅臼温泉ルート上での 9 件を含む)であった。

今年度は、羅臼市街地北側一岬町地区において、海岸町および岬町の住宅裏(鳥獣保護区内)で複数個体が繰り返し目撃されたことが最多目撃件数となる要因となった。特に、海岸町の天狗岩付近と岬町のモセカルベツ地区では、一般住宅から排出された生ゴミや水産加工場の残渣に餌付いたとみられる個体が頻繁に目撃された。岬町の知円別地区では、生ゴミ等を荒らされるといった被害は報告されていないが、道路沿いに生育したフキを採食するために現れた個体が頻繁に目撃された。ルサー知床岬地区では、相泊以北の崩浜で

大型のクジラ死体が漂着したことにより複数の個体が誘引され、8月9日から約1カ月にわたり、入れ代わり採食し続けたため、遊漁船および海岸トレッカーからのヒグマ目撃情報が多数寄せられる結果となった。湯ノ沢町～知床峠地区では、知床横断道路沿いの羅臼湖入口～知床峠駐車場にかけて、0歳子2頭連れの親子が複数回目撃された。また、知床国立公園羅臼温泉野営場のキャンプサイト内で目撃された事例があった。

なお、8月にピークとなったヒグマの目撃は、9月前半まで高頻度で推移した後、同月の後半では急速に収束し、昨年度最多だった10月には、目撃件数は1件のみとなった。

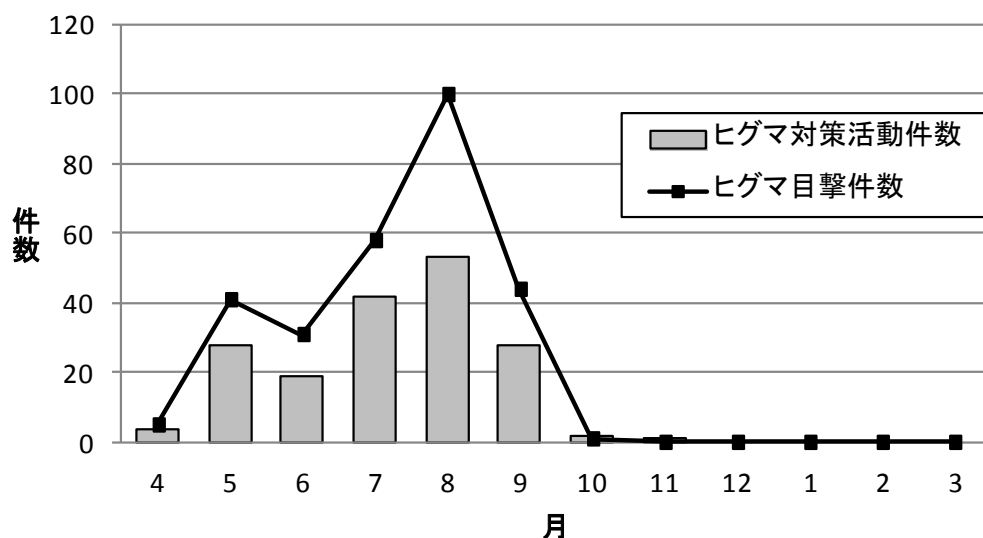


図 1-3. 羅臼側におけるヒグマ目撃件数とヒグマ対策件数の月別推移
(平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日)

②ヒグマ対策活動

国立公園および鳥獣保護区内におけるヒグマ対策活動件数（以下、対応件数）は、斜里側 823 件、羅臼側 177 件の合計 1,000 件であった（表 1-4）。昨年度（斜里 388 件、羅臼 115 件）より斜里側では 435 件多く、羅臼側では 62 件多かった。斜里側と羅臼側における対応件数の地区別・月別の状況は、それぞれ以下の通りである。

地区別に集計すると、斜里側では昨年度と同じく、幌別・岩尾別地区が 589 件（昨年度 266 件）と突出して多かった。羅臼側では昨年度と異なり、羅臼市街地北側一岬町地区での対応が最も多く 115 件（昨年度 53 件）となった。

対応件数を月別に集計すると、ヒグマ目撃件数の増加と比例して 8 月が 287 件と最も多く、次いで 7 月が 222 件となった。両町とも 7～8 月にヒグマ出没が顕著に増加したため、それに伴い対応件数も同時期に集中した。基本的に 1～3 月はヒグマの目撃がほとんどなかったため、威嚇・追い払い等の出没時対策を実施しなかった。

今年度も住宅地へ出没するといった問題行動のあるヒグマについては有害捕獲を実施し

た。同地域におけるヒグマの有害捕獲頭数は、斜里側 4 頭、羅臼側 20 頭の計 24 頭であり（表 1-5）、昨年度の計 6 頭（斜里側 2 頭、羅臼側 4 頭）より 18 頭多かった。捕獲したヒグマの内訳は、16 頭がメス、8 頭がオスであった。成獣メスが 4 頭、成獣オスが 3 頭で、17 頭が 3 歳以下の亜成獣や子であった。斜里側よりも羅臼側で有害捕獲頭数が多いのは、昆布漁業が盛んな羅臼町の産業構造や土地利用形態、地形などの要因が関係している。羅臼側では鳥獣保護区に隣接する住宅地や鳥獣保護区内の昆布番屋が斜里側よりも多く、住宅地や番屋付近へヒグマが出没する事例が発生しやすい。羅臼側ではそのような状況から、地域住民の安全を確保するために、やむなくヒグマを有害捕獲する場合が多かった。

ヒグマの出没の多い場所では国立公園利用者にヒグマの生息地であることを啓発するため、看板の作成および設置を行った（写真 1-1、1-2）。設置場所は国立公園内の道路沿いや知床自然センターといった利用拠点周辺で、斜里側に 12 基、羅臼側に 3 基それぞれ設置した（表 1-6）。看板の内容は設置場所によって一部異なり、全部で 6 種類とした（資料編 1-3）。看板は自然センター駐車場に設置した 2 基を除き積雪期前に撤去した。

表 1-4. 国立公園および鳥獣保護区における地区別・月別のヒグマ対応件数

（平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日）

地区区分	月												総計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
斜里側													
幌別・岩尾別地区	23	46	41	138	176	64	75	18	8	0	0	0	589 (+323)
知床五湖園地地区	5	4	7	26	35	6	7	1	0	0	0	0	91 (+48)
イダシュベツ・カムイワッカ地区	0	0	4	8	6	1	1	0	0	0	0	0	20 (+11)
知床連山登山道地区	0	0	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	4 (+3)
知床横断道地区	0	0	4	4	4	3	0	0	0	0	0	0	15 (+0)
知床岬地区	0	1	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	5 (-1)
幌別川ーオベケブ川地区	0	5	17	3	11	38	9	5	11	0	0	0	99 (+51)
小計	28	56	74	180	234	115	93	24	19	0	0	0	823 (+435)
羅臼側													
ルサー知床岬地区	0	3	4	17	12	9	0	0	0	0	0	0	45 (-9)
湯ノ沢町ー知床岬地区	0	1	5	6	4	0	0	1	0	0	0	0	17 (+9)
羅臼市街地北側ー岬町地区	4	24	10	19	37	19	2	0	0	0	0	0	115 (+62)
小計	4	28	19	42	53	28	2	1	0	0	0	0	177 (+62)
総計	32	84	93	222	287	143	95	25	19	0	0	0	1,000 (+497)

※ () 内は昨年度との比較

表 1-5. 国立公園および鳥獣保護区における有害捕獲個体一覧(平成 24 年)

市町村	捕獲日	場所	推定年齢 (歳)	性別	体重 (kg)	捕獲環境	有害捕獲要因
斜里町	7月1日	ウトロ香川	成獣	♂	208	キャンプ場	国設知床野営場に出没
	8月29日	ウトロ香川	成獣	♀	101	キャンプ場	市街地の道路に出没
	8月31日	岩尾別	成獣	♀	72	ホテル	ゴミ置き場周辺を徘徊
	9月11日	幌別川河口	成獣	♀	66	海岸	追い払いに対して反応しない
羅臼町	5月24日	海岸町	亜成獣	♀	74	二次林	住宅付近斜面に滞留
	5月25日	海岸町	成獣	♀	91	二次林	追い払いへの反応悪く人へ接近
	6月7日	海岸町	亜成獣	♂	89	無立木地	追い払いへの反応悪く再出沒
	7月16日	相泊	1～2	♂	57	道路脇斜面	有人番屋地帯に長時間滞留
	7月24日	昆布浜	2	♂	102	海岸	番屋内に侵入して生ゴミを食べた
	7月26日	岬町	2	♀	66	二次林	水産加工場残渣への餌付き容疑
	7月30日	北浜	1	♀	44	道路脇斜面	海岸線の番屋地帯に侵入・滞留
	8月11日	岬町	0	♀	26	人工林	住宅地に頻繁に侵入
	8月11日	岬町	0	♂	32	人工林	住宅地に頻繁に侵入
	8月17日	セセキ温泉	1	♀	22	道路脇斜面	海岸線の番屋地帯に頻繁に侵入
	8月18日	セセキ	1	♀	32	道路脇斜面	海岸線の番屋地帯に頻繁に侵入
	8月19日	岬町	1～2	♂	46	道路脇	住宅地に頻繁に侵入
	8月20日	岬町	成獣	♂	159	住宅裏斜面	住宅地に繰り返し侵入・住民に威嚇突進
	8月21日	海岸町	0	♀	9	住宅裏斜面	住宅地に繰り返し侵入・生体捕獲困難
	8月24日	栄町高台	1～2	♀	54	羅臼中学裏	公民館、羅臼中学に接近
	8月31日	岬町	成獣	♂	161.4	知円別川左岸	番屋の近くに接近
	9月2日	岬町	亜成獣	♀	35	神社裏	住宅地近くや道路を徘徊
	9月2日	岬町	亜成獣	♀	40.4	旧知円別小中裏	住宅地近くや道路を徘徊
	9月7日	相泊	1～2	♀	39.4	道道脇斜面	港の防波堤上、番屋近くの海岸を徘徊
	9月11日	岬町	3	♀	72	河川敷	追い払いが効かない、釣り人に接近



写真 1-1. 国道沿いにヒグマへの餌やり禁止看板を設置する当財団職員



写真 1-2. カムイワッカ湯の沢入口にヒグマの普及啓発看板を設置する当財団職員

表 1-6. ヒグマ注意看板の設置場所および設置期間

型	設置場所	設置期間
A	知床公園線(五湖～カムイワッカ カーブミラーNo.29～30)	7/15～10/25
A	知床公園線(五湖～カムイワッカ カーブミラーNo.49)	7/15～10/25
A	知床公園線(岩尾別台地直線道路)	7/13～10/25
A	知床公園線(岩尾別台地ヘアピンカーブ)	7/13～10/25
A	町道岩尾別温泉道路(ゲート付近)	7/14～10/25
A	国道334号(幌別橋付近)	7/11～12/5
A	国道334号(ポロピナイ付近)	7/11～12/5
A	国道334号(知床自然センター入口)	7/11～12/5
B	湯ノ沢パーキングエリア脇	7/14～12/6
B	ルサ川河口左岸道道沿い	7/21～10/26
B	瀬石温泉パーキング	7/21～10/26
C(日本語)	知床自然センター駐車場	7/15～
C(外国語)		
D(日本語)	カムイワッカ湯の沢入口	7/12～10/25
D(外国語)		

③地区別のヒグマ出没状況およびヒグマ対応状況

国立公園および鳥獣保護区内の、各地区における詳細なヒグマ出没状況およびヒグマ対応状況を項目別に記載する。地域区分については表 1-1 を参照。

＜斜里側＞

●幌別・岩尾別地区

同地区におけるヒグマの目撃件数は 1,192 件で、昨年同期の 455 件より 737 件多く、2 倍以上となった。月別の目撃件数は、8 月が最も多く 395 件、次いで 7 月が 272 件となった。斜里側の目撃件数および対応件数の 70%以上が、同地区のものであった。この地区の主な目撃地点は、幌別橋から知床五湖に至る国道 334 号線（以下、国道）沿い、道道知床公園線（以下、公園線）沿い、フレペの滝遊歩道など、人の利用が多い場所だった。今年度の目撃件数が顕著に多かった要因として、特定の個体が頻繁に道路沿いや河川敷に出没した事が挙げられる。ヒグマが道路法面などでアリを採食する行動は、例年 7 月によく見られるが、今年度はその状況が 8 月まで続いた。

人の利用する地域に近い場所でヒグマの目撃があった際には、パトロールの実施や誘引物除去作業を行い、道路や遊歩道周辺へのヒグマ定着防止に努めた。以下、場所別の特徴を述べる。

【国道・公園線沿い】

幌別・岩尾別地区の目撃件数の 66%（785 件）が国道や公園線沿いからの目撃であった。これらの道路沿いでは 4 月からヒグマが目撃されるようになり、5 月に目撃件数が急増し、8 月に最多の 283 件となった。ヒグマの出没は、9 月以降減少傾向を示し 12 月まで続いた。例年と同様、6 月からヒグマが道路沿いの草本やアリの巣等を採食する行動が見られた。例年このような行動は 7 月に多く、8 月になるとヒグマの出没件数が減少するが、今年度は 8 月になっても道路沿いでのヒグマの出没が減らなかった。

道路沿いでは、ヒグマを見ようとする観光客の車が路上停車し、渋滞するケースが頻繁に発生したため、ヒグマ対応時にはヒグマの追い払いと共に渋滞の整理にも努めた。また車から降りてヒグマを撮影している人がいた場合には、ヒグマの追い払い前に車に戻るよう指導した。

特記事項として次の事例が挙げられる。8 月 1 日に知床五湖へと向かう公園線沿いで、車の中からヒグマに対しパンを投げる観光客を目撃した（写真 1-3）。当財団職員がすぐにヒグマを追い払いパンを回収したためヒグマが餌付くことはなかった。餌を投げた本人には厳重に注意した。また 8 月 16 日には岩尾別川付近の公園線沿いでゴミ袋を咥えるヒグマが目撃された。現場でヒグマを追い払い、散乱した漬



写真 1-3. 8 月 1 日に車内からヒグマ(右)にパンを投げる観光客(手前車両運転席)

物やメロン等のゴミを回収したが、目撃情報と現場の状況から複数のヒグマ（1頭連れ親子と単独ヒグマ）がゴミを採食してしまったと考えられた。この状況が危険であると判断されたため、関係機関に通報するとともに沿線でのパトロールを強化した（写真 1-4、1-5）。



写真 1-4. 8 月 16 日に岩尾別で回収したゴミ



写真 1-5. 警察官立ち会いのもとゴミの中身を調査する当財団職員

【フレペの滝遊歩道】

フレペの滝遊歩道周辺における今年度のヒグマ目撃件数は、111 件であり、昨年度の 66 件より 45 件多かった。対応件数は 99 件で、ヒグマ出没による遊歩道の緊急閉鎖は 48 回（昨年度 15 回）に及んだ。月別の目撃件数は、8 月が 31 件と最も多く、次いで 10 月が 20 件となった。利用者とヒグマとの危険な遭遇は確認されなかったが、人慣れしたヒグマが遊歩道付近に出没したり、アリの巣や海鳥の巣、カシワの堅果目当てのヒグマが遊歩道付近や滝の展望台直下の崖沿いに出没したりするなど、遊歩道の緊急閉鎖が必要な状況が度々発生した。

目撃件数 111 件のうち、少なくとも 16 件は標識をつけた単独メス成獣であり、このうち 1 件は繁殖期に入ったオス成獣がこのメス個体を追跡している状態であった。10 月にはこのメス個体を含む複数のヒグマが連日のようにカシワの堅果目当てで出没する状況となったことから、遊歩道入口の案内板にカレンダー形式のヒグマ出没情報を掲示し、利用者に注意を促した（写真 1-6）。

対応件数 99 件のうち、18 件はヒグマへの直接的な追い払いを実施し、他は出没時の調査や利用者の誘導等を行った。誘引物除去は、4 月に自然死したエゾシカの回収 1 件のみであった。本年度はヒグマがエゾシカの新生子を捕食するような事例は確認されなかった。



写真 1-6. 10 月にフレペの滝遊歩道案内板に設置したヒグマ出没カレンダー

【幌別川河口】

幌別川河口周辺におけるヒグマの目撃件数は38件で、昨年度の61件より23件少なかった。月別では8月が11件と最も多く、次いで10月が7件となった。例年の傾向と同じように、カラフトマスとシロザケ（以下、サケ・マス）の遡上シーズンに目撃が多くなった。

対応件数は28件で、ヒグマの直接的な追い払いが14件と最も多かった。4月には河口付近でシカの自然死個体が複数確認され、ヒグマの誘引物除去として6体を回収した。5月には幌別橋下でシカを採食するヒグマがいたため、橋から十分離れた場所まで移動させた。幌別川河口では8月に入り、サケ・マス釣りを目的とした釣り人が多くなったため、河口周辺に食物やゴミの管理の徹底を促す看板を設置した。釣り人とヒグマとの危険な接触は確認されなかった。

河口にヒグマが出没するようになるとヒグマの撮影を目的としたカメラマンが時々訪れるようになったが、昨年のように数名のカメラマンが常に待機するような状況にはならなかった。昨年出没したような人目を気にせずサケ・マスを捕食するヒグマが、今年は岩尾別川に現れ、カメラマンが岩尾別川で待機する状況となったためである。

【岩尾別川】

岩尾別川沿いにおけるヒグマの目撃件数は258件で、昨年度の68件の3倍以上となった。月別の目撃件数は7月が68件と最も多く、次いで8月が59件となった。対応件数は158件で、ヒグマの直接的な追い払いが100件と最も多く、次いで出没時の調査が48件となった。またやむなくヒグマを有害捕獲する事例が1件あった。

昨年度より目撃件数が顕著に多かった理由として、人慣れしたヒグマが複数出没した事が挙げられる。岩尾別川沿いおよび温泉道路沿いでは、7月から10月にかけて少なくとも2組の兄弟グマ（推定1歳）が頻繁に出没した。このヒグマ達はほとんど人を恐れず道路沿いや宿泊施設周辺に何度も出没し、その度に観光客やヒグマ撮影目当てのカメラマンが周囲に集まる状況となった（写真 1-7）。そのためヒグマの直接的な追い払いの他に、観光客やカメラマンに対してヒグマに接近したり餌をやったりしないよう注意喚起を行った。これらの個体は多数回の追い払いに対してほとんど行動改善の様子が見られないことから、関係機関（環境省・斜里町）と協議の上、奥山放獣のための捕獲を試みる事となった。7月27日に岩尾別川沿いの林内に箱罠を設置し、これらの個体の捕獲を試みた。ただし他個体が捕獲される可能性があるため、夜間は扉を閉鎖することとした。箱罠による捕獲を約1週間試みたが該当個体は捕獲されなかったため、次の手段として麻酔銃による捕獲が検討された。

9月4日と5日にそれぞれ岩尾別温泉道路沿いで麻酔銃によるヒグマ捕獲を試行した。これまで知床ではヒグマの麻酔銃による捕獲の前例がなく、実施には安全性を重視した。実施する際には環境省と当財団職員と合わせて7～9人体制で、ヒグマの動向の調査、通行車両の一時的な制止、公園利用者への説明などを行った。9月4日は1頭のヒグマに対し麻酔銃を発射したが、麻酔薬がうまく注入されず逃走された。9月5日は1頭のヒグマに対し麻酔銃を発射し、麻酔の効果を確認したが、ヒグマが濃い藪の中に逃げ込んでしまった。藪

の中でヒグマを追跡することが非常に危険であるため、捕獲作業を中止した。

これらの試行結果から、野外において特定のヒグマを選択的に生体捕獲することは困難であると考えられた。箱罟は無差別にヒグマを捕獲する可能性があり、麻酔銃はヒグマを不動化させるまでに逃走される可能性が高い。今回麻酔銃による捕獲は成功しなかったが、例えば河原や海岸のような見通しの良い環境であれば成功する可能性はあると考えられた。ただし作業の安全性を考慮すると、実施できる場所は限定的と言える。その後、これらの個体に関して生体捕獲は行わず、引き続き監視を継続することとなった。

10月になると岩尾別川沿いにカメラマンが集結し、ヒグマが出没すると車両の通行に支障が出る程の渋滞が頻繁に発生するようになった（写真 1-8）。そのためヒグマが出没する度に追払いを実施し渋滞を解消させたり、パトロールを実施するなどの対応を行った。これらのヒグマは11月以降ほとんど目撃されなくなった。

岩尾別川沿いでの特記事項として、岩尾別温泉のホテルのゴミ置き場がヒグマに荒らされた件とさけますふ化場の建物内にヒグマが侵入した事例が挙げられる。詳細は次の通りである。8月31日に岩尾別のホテルのゴミ置き場を荒らして生ゴミを食べる単独ヒグマが目撃されたため、追払いと散乱したゴミの回収を実施した。同日ヒグマが再度出没しゴミ置き場を壊しているとの通報を受け、現場で同一のヒグマを発見しやむなく有害捕獲とした（写真 1-9）。同ホテルにはゴミの管理を徹底するよう厳重注意した。

10月21日に孵化場より電気柵内にヒグマが侵入したとの情報が入り現場を調査した。ヒグマはガレージに侵入しシャッターを壊すなどの被害を出し、最終的に電気柵の下を掘って逃走したとのことだった（写真 1-10）。ヒグマがゴミなどの人為物を食べた痕跡は確認されなかったが、建物に侵入する行動が危険であると判断されたことから、孵化場に電気柵の強化を要請するとともに、有害捕獲もやむなしの態勢を整えることとなった。その後パトロールを実施し警戒態勢を継続したが、同個体が孵化場近辺に出没することはなかった。



写真 1-7. 7月22日に温泉道路沿いでヒグマを至近距離で撮影する観光客



写真 1-8. 10月21日に岩尾別川に出没したヒグマのため渋滞する知床公園線



写真 1-9. 8 月 31 日にヒグマに壊されたゴミ置き場



写真 1-10. 10 月 21 日にヒグマが侵入したガレージの窓についた足跡

●知床五湖園地地区

同地区におけるヒグマの目撃件数は 198 件であり、昨年度の 58 件の 3 倍以上となった。月別の目撃件数は 7 月の 93 件が最も多く、次いで 8 月の 45 件となった(表 1-7)。例年、ヒグマ目撃件数は 7 月が最も多く 8 月になると急減する傾向にあったが、今年度は 8 月の目撃件数が比較的多く、例年とは異なる傾向となった。目撃場所別では、高架木道からの目撃が 98 件(昨年度 12 件)、地上遊歩道からの目撃が 92 件(昨年度 42 件)、駐車場周辺での目撃が 8 件(昨年度 4 件)であった。ヒグマの目撃地点は例年、ミズバショウ群落のある湿地帯や湖畔に集中するが、今年度はそれらに加えて高架木道周辺の草地での目撃が多かった。

対応件数は 91 件で、昨年度の 43 件の 2 倍以上となった。ヒグマ出没時の調査が最も多く 51 件、次いでヒグマ対策パトロールが 20 件となった。本年度はヒグマが駐車場近辺に出没するケースが例年より多く、直接的な追い払いも 13 件あった。開園期間を通して、利用者とヒグマとの危険な遭遇等は確認されなかった。

表 1-7. 平成 24 年度 知床五湖におけるヒグマ目撃状況(月別・場所別)

目撃場所	月								合計
	4	5	6	7	8	9	10	11	
地上遊歩道	0	2	13	45	14	9	8	1	92
高架木道	1	2	20	41	30	2	1	1	98
駐車場周辺	0	0	0	7	1	0	0	0	8
合計	1	4	33	93	45	11	9	2	198

【利用調整地区制度導入とヒグマ対応について】

同地区は昨年度から地上遊歩道に利用調整地区制度が導入され、新たな利用システム導入後 2 年目である。利用ルールは昨年度とほぼ同様であるが、変更点として開園から 5 月 9 日までが植生保護期になったこと、地上遊歩道と高架木道の接続路を利用する周回路となったことが挙げられる。各利用期間におけるヒグマ出没時の対応は昨年度と同様である(表 1-8)。

表 1-8. 平成 24 年度における知床五湖の利用ルール概要

	ヒグマ活動期	植生保護期	自由利用期
期間	5/10-7/31	開園-5/9、8/1-10/20	10/21-閉園
登録引率者	必要	不要	不要
認定手続き	必要	必要	不要
利用料	ガイド料+認定手数料	認定手数料	不要
地上遊歩道の利用形態	周回ルート： 一方通行で FH>5湖>4湖>3湖>2湖>1湖>高架木道	以下2つの周回ルートが選択可能 ①FH>5湖>4湖>3湖>2湖>1湖>高架木道 ②FH>2湖>1湖>高架木道	
高架木道との接続	あり	あり	
ヒグマ出没時	登録引率者が地上遊歩道の利用継続・中止を判断し、中止の場合自分の引率するグループを避難誘導する	当財団が利用者を避難誘導する	

【地上遊歩道の供用状況】

地上遊歩道の供用状況を表 1-9 に示す。開園（4 月 20 日午後）から閉園（11 月 25 日午後）までの全 219.5 日中、83 日間がヒグマ活動期、100.5 日間が植生保護期、36 日間が自由利用期となった（1 日の午前と午後をそれぞれ 0.5 日として計算）。

植生保護期においてヒグマが原因で地上遊歩道が全面閉鎖もしくは一部閉鎖された日数は合計 43.5 日となり、昨年度同期（8.0 日）の 5 倍以上であった。ヒグマ活動期において登録引率者がヒグマと遭遇し、ツアー中止となった回数は 39 回であり、昨年度同期（24 回）より 15 回多かった。自由利用期ではヒグマ出没による地上遊歩道閉鎖は 1.0 日のみであり、昨年度同期（25.5 日）より大幅に少なかった。

今年度は 7～8 月にかけて高架木道に近い場所に複数のヒグマが頻繁に出没したが、これらのヒグマが地上遊歩道方面に移動するケースもあり、地上遊歩道の利用者とヒグマとの遭遇が懸念された。そのため行政と地元関係機関で構成する知床五湖利用のあり方協議会は、植生保護期において高架木道から見えるヒグマが地上遊歩道方面へ接近する状況が発生した場合に緊急的に地上遊歩道を閉鎖する基準を設けた。閉鎖の判断基準は高架木道から一湖畔のエリアでヒグマが目撃された場合および高架木道の海側（図 1-4 の点線部より地上遊歩道側）にヒグマが目撃された場合である。今年度、高架木道側からヒグマが接近して地上遊歩道が閉鎖された事例は 4 件あった（8 月：3 回、9 月：1 回）。

表 1-9. 平成 24 年度における知床五湖地上遊歩道の供用状況

	期間	日数	全面開放 日数 (%)	ヒグマを原因とする閉鎖日数				積雪・気象を原因とする閉鎖日数			
				全面閉鎖 (%)	3-5湖閉鎖 (%)	全面閉鎖 (%)	3-5湖閉鎖 (%)	全面閉鎖 (%)	3-5湖閉鎖 (%)	全面閉鎖 (%)	3-5湖閉鎖 (%)
植生保護期	4/20～5/9	19.5	2.5 13%	0.5 3%	0.0 0%	0.5 3%	16.0 82%				
ヒグマ活動期	5/10～7/31	83.0	-	-	-	2.5 3%	-				
植生保護期	8/1～10/20	81.0	38.0 47%	42.0 52%	1.0 1%	0.0 0%	0.0 0%				
自由利用期	10/21～11/25	36.0	31.5 88%	1.0 3%	0.0 0%	3.5 10%	0.0 0%				

※1日の午前と午後をそれぞれ0.5日として計算している。日数は0.5日単位で集計した値。

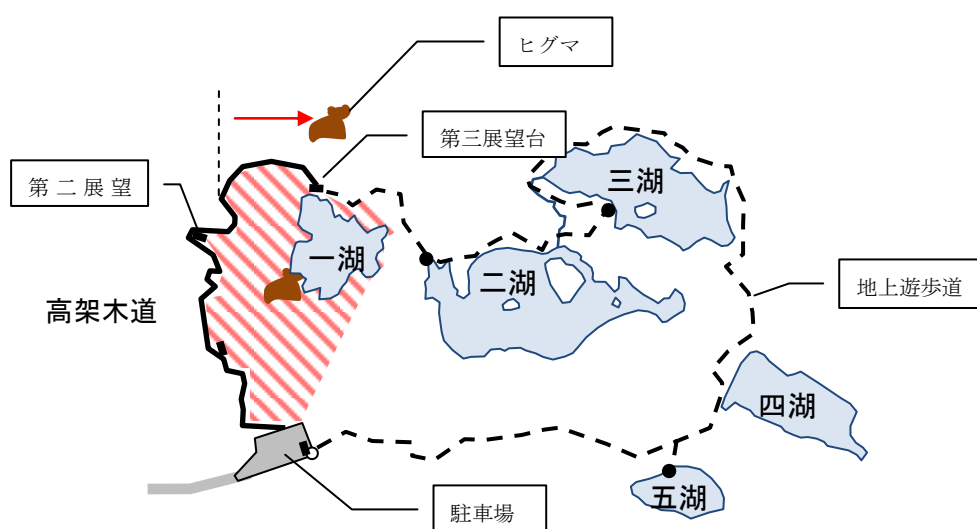


図 1-4. 高架木道からヒグマが目撃された際の地上遊歩道閉鎖の判断基準

※赤斜線のエリアにヒグマが入った場合もしくは破線より地上遊歩道側へ移動した場合、地上遊歩道閉鎖(ヒグマ活動期を除く)

【高架木道周辺のヒグマ出没状況について】

高架木道からのヒグマ目撃件数は昨年度同期より大幅に多くなった。これは高架木道を含む知床五湖園地地区で行動するヒグマが複数出現したためである。高架木道からのヒグマ目撃は6月以降に急増し、7月に最多の41件となり、ヒグマが高架木道から長時間見えている状況が連日のように発生した。高架木道周辺に出没したヒグマはほとんどが特定の個体であり、少なくとも3組のヒグマ（標識付き1才1頭連れ親子、無標識1才1頭連れ親子、標識付き単独）が繰り返し出没した。このうち2組の親子は高架木道への顕著な馴化が見られ、日時が経過するごとに人が大勢いるにも関わらず高架木道へ接近したり、高架木道の下を通過したり、駐車場へ接近するといった行動が確認されるようになった（写真1-11）。8月になるとこれらの親子の子供を思われる子グマが単独で目撃されるようになった。またヒグマが出没することで高架木道の利用者がヒグマを見ようと一箇所に集中し、

混雑するといった状況が発生した（写真 1-12）。高架木道からヒグマが見えた場合、駐車場や建物に近い場合を除いて追払いを実施しなかったが、ヒグマへの餌付け等が懸念されることから、ヒグマと高架木道の距離が近い場合（約 50m 内）は監視のための人員を配置した。今年度は高架木道からの餌付け行為は確認されなかった。

9 月以降、高架木道からのヒグマ目撃件数は大幅に減少した。7～8 月においてヒグマは高架木道周辺で主にアリを採食していたが、9 月以降は別の食物に移行したと考えられた。



写真 1-11. 7 月 16 日に高架木道付近に出没した 1 才 1 頭連れ親子



写真 1-12. 8 月 8 日にヒグマが出没したため混雑する高架木道

【駐車場近辺のヒグマ出沒状況と電気柵について】

知床五湖園地では昨年度と同様、駐車場や休憩施設を利用する人の安全を確保する目的で、6～11 月の期間中に駐車場周辺に電気柵を設置した。電気柵は高架木道の入口から五湖フィールドハウスの裏を周り駐車場入り口の山側林内まで駐車場の片側を囲うように設置された（図 1-5）。電気柵設置には環境省・北海道・斜里町・当財団の職員が作業にあたり、設置後の維持管理は 11 月上旬に撤去するまでの期間、当財団で行った。開園期間中にヒグマが駐車場に侵入することはなかったが、駐車場周辺でのヒグマ目撃件数は 8 件あった。7



写真 1-13. 7 月 24 日にヒグマを見るため電気柵に接近する観光客

月にヒグマが高架木道入口付近に出没した際、設置した電気柵ぎりぎりに観光客が接近する事例が見られた（写真 1-13）。ヒグマへの接近と感電の危険性があることから、電気柵の手前に通電していないラインを増設した。

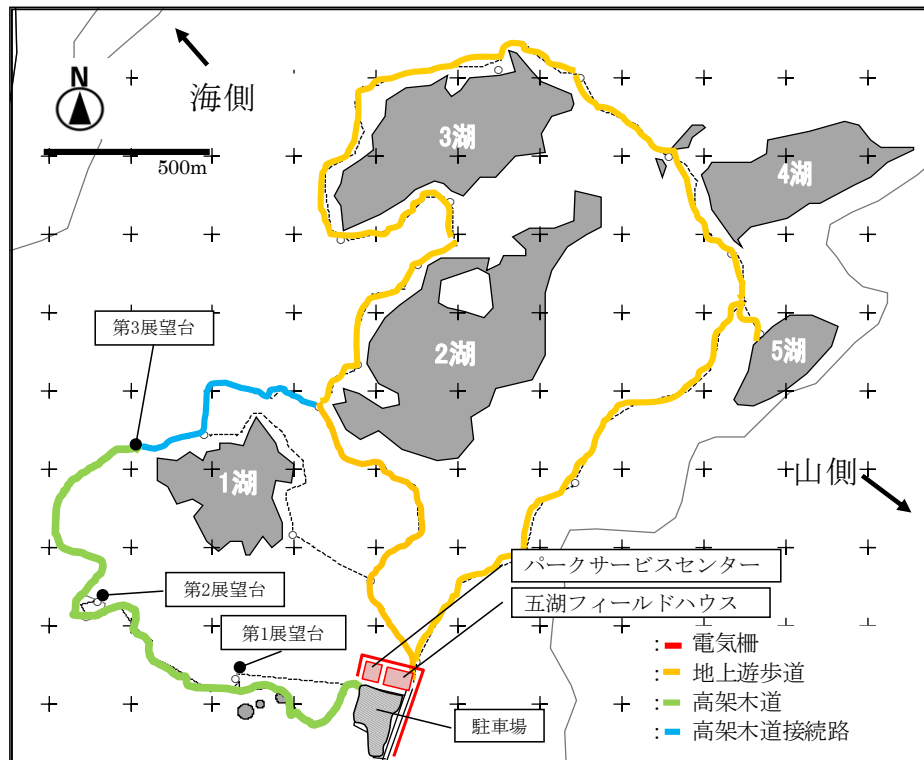


図 1-5. 知床五湖園地地区における歩道や施設等の状況(250m メッシュ)

●幌別川ーオペケブ川地区（国立公園外の鳥獣保護区）

同地区での目撃件数は 125 件で、昨年度の 50 件より 75 件多かった。月別では 9 月が 41 件と最も多く、次いで 6 月が 27 件となった。主な目撃場所はウトロ東、幌別川駐車帯の山側斜面、フンベ川河口、オシンコシンの滝付近や弁財崎の海岸であった。9 月にヒグマの目撃が多かった要因として、サケ・マスの遡上時期にフンベ川など複数の河口にヒグマが出没したことが挙げられる。特記事項として、ウトロ地区の国設知床野営場（以下、ウトロ野営場）に面した林にヒグマが侵入する事例が 2 回発生し計 2 頭が有害捕獲となった事例や、オシンコシンの滝にヒグマが頻繁に出没した事例が挙げられる。

ウトロ野営場では近年ヒグマの侵入が少なからず発生し、数頭が捕獲されている。今年度は 7 月と 8 月にそれぞれ単独のヒグマが侵入した。7 月の事例では、ウトロ野営場に面した雑木林でヒグマが目撃され、現場を踏査中に単独ヒグマを発見した。出没場所がウトロ市街地を囲う柵（以下、市街地柵）の内側であり、市街地柵外へ追い出すのが困難であることから有害捕獲となった。8 月の事例では単独ヒグマがウトロ漁港から道路を渡りウトロ野営場に面した林の中に侵入する姿が目撃された。同個体も市街地柵外へ追い出すのが困難な状況から有害捕獲となった。この個体が有害捕獲される前日、ウトロ漁港では停泊中の漁船にヒグマが侵入し船内を荒らすという事例が発生していた。その後の解剖で同個体の胃内容物の中からツブ貝漁の餌と考えられる魚肉が多量に確認されたことから、漁船に

侵入したヒグマは同個体であった可能性が非常に高いと考えられた。その後、漁港内にヒグマが侵入したという事例は報告されなかった。このように船内にヒグマが侵入したのは前例のない事であった。

オシンコシンの滝では例年ヒグマの出没が稀であったが、今年度は特に 9 月に多く、少なくとも 12 件あった。出沒個体は月の輪模様の特徴から同一個体であると考えられたが、この個体はカラフトマス目当てにフンベ川河口やオショコマナイ川河口（三段の滝）などにも出沒していた。この個体は人に対する警戒心が弱く、日中に人目を気にせずマスを捕獲したり、人が大勢いるオシンコシンの滝に接近したりするなど問題行動が見られた。滝付近にヒグマが出沒した際は直接的な追い払いを行うとともに、観光客がクマに接近しないように川側にロープと注意看板を設置した（写真 1-14、1-15）。この個体は 10 月以降オシンコシンの滝から離れたが、その後も三段の滝付近の海岸をうろつく姿がたびたび目撃された。11 月下旬にイワシが多数海岸に打ち上がった事があり、この個体はイワシに誘引されて海岸に出沒していたと考えられた。その後、12 月 29 日に鳥獣保護区外でメス成獣が狩猟捕獲されたが、個体の特徴や捕獲位置から当個体の可能性がある。捕獲個体の胃内容物からはイワシが確認された。

釣り人による野営や調理などの不適切な行為が問題となってきた幌別駐車帯は、今年度もヒグマの出沒が頻繁であるという理由で、7 月 25 日から 10 月 31 日まで道路管理者によって閉鎖された。釣り人とヒグマとの危険な遭遇は特に確認されなかった。



写真 1-14. 9 月 21 日にオシンコシンの滝下部の川沿いにロープと看板を設置する当財団職員



写真 1-15. 9 月 21 日にオシンコシンの滝に設置した看板

●イダシュベツ・カムイワッカ地区

同地区における目撃件数は 85 件で、昨年度同期の 90 件より 5 件少なかった。月別では 7 月が 37 件と最も多く、次いで 6 月が 29 件、8 月が 13 件と続いた。カムイワッカ湯の沢（以下、湯の沢）周辺での目撃が 22 件、湯の沢に至る公園線沿いでの目撃件数が 68 件であった。カムイワッカ方面の道路の供用状況は昨年度と同様で、6 月 1 日～11 月 2 日までの期間において、一般車両が通行可能であった（ただしマイカー規制期間である 8 月 1～25 日、9 月 15～24 日の期間を除く）。

湯の沢付近では人を気にしないヒグマが出没する事例が度々発生した。6月13日に巡回中のグリーンサポートスタッフ（林野庁職員）より1才1頭連れ親子が湯の沢沿いに出没しているとの連絡を受け、カムイワッカ橋の下にいる同親子の追い払いを行った。この親子は当財団が通報を受けて現場に到着して追い払うまでの約1時間、湯の沢沿いで滞留し続けるなど人を気にしない個体であった。6月28日には一の滝上部に単独亜成獣が出没したため、一時的に利用者の立入を止めて追い払いを行う事例が発生した。この亜成獣も人を気にしない個体であり、このような人を避けないヒグマの目撃が知床公園線沿いでも多数寄せられた。また8月20日にはカムイワッカゲートの手前でヒグマを原因とする落石が発生した。法面から道路上に直径80cm程の石が落ちてきたとのことだったが、幸い被害はなかった。これはおそらくヒグマがアリを食べるため法面上部の地面を掘ったためと考えられた。

特筆すべき点として次の事例が挙げられる。7月23日に知床公園線沿い（イダシュベツ川付近）でヒグマの写真を撮るため車を降りてヒグマに約10mまで接近した観光客が、ヒグマに威嚇されて逃げる際に転倒し、擦過傷を負うという事例が確認された。直接的なヒグマによる怪我ではないものの、一歩間違えば大事故に繋がっていた可能性もある。一般車両が通行可能になった事で、今後もこのような事例が発生する可能性は十分に考えられる。

●知床連山登山道地区（斜里側）

同地区での目撃件数は56件で、昨年度同期（60件）と同程度であった。月別の目撃件数は8月が最も多く19件、次いで7月が18件と、登山者の多い夏期に集中した。山域別では羅臼岳方面が43件と最も多く、次いで硫黄山方面が9件となった。他の4件は三ツ峰など縦走路での目撃であった。

登山者のヒグマによる事故は発生しなかったが、人の存在を気にしないヒグマの目撃情報が多数寄せられた（表1-10）。ヒグマが登山道から動かず長時間下山できなかった事例や、登山者がヒグマの脇を通ろうとしてヒグマに唸られた事例、巡視中の林野庁職員（グリーンサポートスタッフ）がヒグマに1mの距離まで接近された事例などがあった。下山中にヒグマと出遭った事例では、登山者が一度羅臼側へ下りようとしたが途中で道が分からなくなり、携帯電話で警察に連絡して指示を仰いだ後、最終的に斜里側へ登り返して無事に下山したとのことだった。7月28日には羅臼平で登山者のデポしたザックがキツネに荒らされたという事例が発生したが、すぐ傍に親子連れのヒグマもいたとのことだった。ヒグマがザックを荒らしたかどうかは不明であるが、羅臼平付近ではヒグマの目撃情報が複数寄せられており、荷物の管理に十分注意する必要がある。8月24日には環境省職員が登山道上を歩いて接近してくるヒグマにクマスプレーを噴射して撃退している。このヒグマは前方に人がいると認識したにも関わらず接近し続けるなど、まったく人を恐れない個体であった。

このような状況からヒグマに対する警戒を促す注意看板を羅臼岳と硫黄山の登山口に設

置した（図 1-6、1-7）。同地区では近年、登山者とヒグマとの危険性の高い遭遇事例が多くなっており、今後も注意を要する状況である。

表 1-10. 平成 24 年度 知床連山登山道地区における登山者との軋轢を伴うヒグマの目撃事

期日	場所	状況
7月2日	羅臼岳登山道	登山道で親子ヒグマがいた。登山者はルートを変え無事下山。
7月10日	硫黄山登山道	登山道に2頭連れの親子ヒグマがいた。登山者が近づき、母グマに唸られる。
7月28日	羅臼岳登山道	羅臼平にて親子ヒグマがデポリュックの周りを徘徊した。さらに人に向かって歩いてきた。
8月1日	羅臼岳登山道	羅臼平～大沢間にて登山者が霧の中でヒグマ2頭と遭遇。40分待ったが動く気配はなく、突破を試み、クマに唸られた。
8月11日	縦走路	三ツ峰付近に親子ヒグマがいた。登山者は2時間程待機したが、クマが動かなかったため羅臼平へと引き返した。
8月12日	縦走路	三ツ峰付近に親子ヒグマがおり、登山者は縦走を諦め下山。
8月14日	羅臼岳登山道	550m岩峰にて登山者が単独ヒグマに唸られ、前を横切られた。
8月14日	羅臼岳登山道	羅臼平～羅臼岳山頂に親子ヒグマがいた。母グマは人を避けたが、子グマは徘徊。登山者同士で声かけにより、クマの存在に早く気づき退避。
8月14日	羅臼岳登山道	羅臼平～羅臼岳山頂に親子ヒグマがおり、山頂にいた登山客が立ち往生。爆竹等を音を鳴らすグマは無反応。
8月15日	羅臼岳登山道	羅臼平～羅臼岳山頂に親子ヒグマがいた。クマは登山客に対し無反応。
8月17日	羅臼岳登山道	羅臼平のフードボックス付近で2頭連れの親子ヒグマが徘徊していた。
8月24日	硫黄山登山道	旧採掘場付近で巡視中のGSS2名が単独ヒグマと遭遇。クマは人に距離1mまで接近したが、威嚇している様子なし。

ヒグマ出没情報

7月に入り、知床連山縦走路および羅臼岳登山道にてヒグマとの近距離遭遇が頻発しています。目撃されたヒグマは複数おり、いずれも人を全く気にせず登山道上を徘徊する状況が報告されています。

危険な遭遇を避けるため、鈴などの音を鳴らして行動して下さい。

ヒグマと遭遇した場合、静かにゆっくりとクマから離れ、来た道を引き返して下さい。クマ撃退スプレーの携行を強くお勧めします。



クマ撃退スプレーは自然センター・本下小屋で有料レンタルしています。

テント泊を予定される方は、キャンプ指定地を利用し、食料はフードロッカーに保管して下さい。

ヒグマの目撃情報は下山後すぐに知床財団（0152-24-2775）、または本下小屋までお知らせください。緊急時は尾根からでも電話ください。

環境省・斜里町・知床財団

図 1-6. 7 月 3 日に羅臼岳と硫黄山の登山口に設置した注意看板



人を認識しても登山道上をそのまま接近

クマスプレーで撃退

8月24日13:15 560m～650m岩峰間登山道

※ヒグマに関する情報はすぐにご連絡下さい。 知床財団0152-24-2775

図 1-7. 8 月 25 日に各登山口に設置した注意看板

●知床横断道路地区（斜里側）

同地区でのヒグマ目撃件数は 42 件となり、昨年度の 33 件より 9 件多かった。月別では 6 月が 13 件と最も多く、次いで 7 月が 12 件となった。対応件数は 15 件であり、9 件はヒ

グマ出沒時の調査、4 件は威嚇・追い払いであった。誘引物除去は 2 件で、シカの交通事故死体を回収した事例と道路上に投棄されたゴミ（バーベキューの残飯など）を回収した事例であった。2 件ともヒグマの痕跡は確認されなかった。

特記事項として次の事例が挙げられる。6 月 22 日に道路沿いで 2 頭連れ親子を発見した観光客が、車から降りた際に親グマに突進される事例が発生した。当事者はすぐに車に乗り込んだため、ヒグマとの接触はなかった。また 9 月 16 日にはヒグマに対して餌付けをしている人達がいたとの通報を受けた。通報者は前日の夜間にトラックの荷台から飼料のようなものを撒いている人達を目撃し、不審に思って何をしているか聞いたところ、ヒグマに給餌しているとの返答を受けたとのことだった。この通報を受け現場を調査したが飼料のようなものは確認できなかった。このように大掛かりな餌付けは過去に例のないことだった。9 月上旬に知床の痩せたヒグマの写真がマスコミで取り上げられたことが影響したのかもしれない。その後、餌付けに関する情報は確認されなかった。

●知床岬地区（斜里側）

同地区でのヒグマ目撃件数は 4 件であった。同地区の目撃は人とヒグマの軋轢を伴うもののみ集計しており、実際のところ漁業関係者の話では日常的にヒグマが出沒しているとのことであった。今年度から文吉湾では湾内へのヒグマ侵入を防止する目的で、アサヒビール株式会社からの寄付金を受けた知床財団が独自事業として電気柵を設置した。電気柵のラインの一部は、昨年度の秋期に環境省が設置したエゾシカ捕獲用仕切り柵に、同省の許可を得て設置した。電気柵を設置した 5 月 24 日以降も海側を伝ってヒグマが湾内に入ってきているとの連絡を受け、7 月 4 日に末端部の改良を行った。しかしその後もヒグマが海岸沿いに歩いて来たり、海を泳いだりして侵入しているとのことで、電気柵のみでヒグマの侵入を完全に防ぐことが困難な状況であった。

<羅臼側>

●ルサー知床岬地区

ヒグマ目撃件数は 112 件、対応件数は 45 件であり、目撃件数は昨年度から 7 件増加し、対応件数は 9 件減った（昨年度は目撃 105 件、対応 54 件）。

月別では 8 月の目撃件数が 48 件と最も多く、半数以上の 37 件が相泊以北での目撃であった。一方、ルサー相泊間での目撃については、7 月が最も多かったが、その件数は 13 件と、全体の目撃件数に占める割合は小さかった。相泊以北でのヒグマ目撃情報は、ルサフィールドハウス（以下、ルサ FH）もしくは羅臼ビジターセンター等でヒグマ撃退スプレー・フードコンテナをレンタルした先端部地区利用者から、レンタル返却時に得たヒグマ目撃情報のほか、羅臼遊漁船釣り部会が釣り客等を瀬渡しした際のヒグマ目撃情報が大部分を占めた。

本地区では、ヒグマへの接近および餌やりを禁止する看板を 2 基設置し、利用者への注意喚起を促した。以下、道道 84 号知床公園羅臼線（以下、公園羅臼線）の起点である相泊

を境に場所別の特徴を述べる。

【相泊川左岸―知床岬】

目撃件数72件、対応件数は7件であった。相泊以北の目撃件数が多くなった主な要因として、羅臼遊漁船組合からのヒグマ目撃情報が寄せられるようになったことと、崩浜に大型のクジラ死体が漂着したことが挙げられる。前者は、羅臼遊漁船組合が環境省から受託した業務の中に、船上から目撃した海岸トレッカーやヒグマの情報をルサFHに提供することが含まれていたためであり、後者の大型クジラ死体に餌付いた多数のヒグマを目撃した遊漁船組合員からの情報がルサFHに寄せられたためである。なお、この大型のクジラ死体は、8月9日に海岸トレッカーによって漂着が確認され、その後、9月中旬まで、最大同時に10頭以上のヒグマによって採食され続けた（写真1-16）。このような状況を受け、環境省と羅臼町から相泊以北の海岸への立ち入り自粛要請が出された。自粛要請は、漂着したクジラ死体の肉がほぼなくなったことが確認された9月15日まで続いた。また、同地域では、船による瀬渡しを利用して大型クジラ死体漂着現場を避けて海岸トレッキングを強行する利用者も見受けられた。例年、本地区の相泊以北の海岸においては、釣り客や海岸トレッカーとヒグマの危険な遭遇例が確認されていたが、前述したようにヒグマと遭遇する確率が例年以上に高かった状況であったにもかかわらず、今年度においては危険な遭遇事例は報告されなかった。赤岩地区では、3軒の昆布番屋が漁業生産活動を行っており、夏期の漁期には住み込みで作業している。昨年度は天然昆布の生育状況が悪く、漁業生産活動が行われていなかったため、同地区でのヒグマ目撃やそれに伴う対応はなかった。また、アサヒビール株式会社からの寄付金を受けて実施を予定していた電気牧柵の設置も見送られていた。今年度は、例年通り7月上旬から9月上旬の漁期に番屋生活に入るとのことであったため、7月6～7日に3軒の番屋に電気牧柵を設置した（写真1-17）。その後、同地区においてヒグマが高頻度に出没していたため、8月2日に追い払いを行ったが、漁業生産活動に支障をきたすようなヒグマの異常接近はなく、有害捕獲に至ることはなかった。平成22（2010）年度以前は、同地区で漁業生産活動の妨げになる問題個体への対応が複数回あり、有害捕獲も行っていたが、今年度はそのようなことがなかったことから、電気牧柵を設置したことによる一定の効果は認められたと言える。ただし、電気牧柵の設



写真 1-16. 8月19日に崩浜に漂着したクジラの死体を採食するヒグマ(知床博物館山中館長提供)



写真 1-17. 赤岩地区の昆布番屋に設置された電気牧柵

置・撤去および管理は手間がかかり、漁業者のみの管理によって有効な電圧を維持するのは困難であるという意見が漁業者から寄せられた。

ニカリウスの定置網漁番屋周辺においても、7月上旬頃からほぼ毎日ヒグマが出没し、人間を恐れず逃げないといった漁業生産活動に支障をきたす行動が問題となっており、有害捕獲を前提とした張り込みを実施したが捕獲には至らなかった。

8月12日には、知床岬を目指していた3人パーティーの海岸トレッカーが赤岩北部の海岸段丘斜面でヒグマと遭遇し、1名がヒグマに追いかけられたようだと情報が赤岩の昆布番屋経由でもたらされた。しかし、再度情報を収集した結果、追いかけられたというのは誤報であり、ヒグマの出現によって分散した1名が他の2名からはぐれただけであったことが明らかになった。なお、このパーティーは、ヒグマと遭遇する直前にヒグマの自然死体を発見しており、後日、同一と思われる白骨化した自然死個体が知床財団職員によって再発見された（写真1-18）。



写真1-18. 9月26日に赤岩地区の海岸で発見されたヒグマの前肢

地元小学校の生徒が徒歩で知床岬を目指す、羅臼町の伝統行事「ふるさと少年探検隊」は今年度で30回目を迎え、7月30日から8月4日に開催された。過去最多のヒグマ遭遇件数を記録したが、事故は発生しなかった。

【ルサー相泊川右岸】

目撃件数40件、対応件数は38件であった。ルサー相泊間においては、平成22（2010）年度からヒグマ撮影目的のカメラマンがヒグマに接近して撮影する問題行動が複数回確認されていたが、今年度においてはこのような行為は確認されなかった。

本地区では、5月中旬から7月にかけて、親子グマの目撃が相次いだ。目撃された親子の子グマは2頭で、ルサ川から瀬石にかけての海岸段丘斜面で目撃されることが多かった。また、北浜では、海岸に群生していたセリ科草本（マルバトウキ）を採食しているヒグマが複数回目撃された（写真1-19）。

本地区では昨年度トドの2死体が漂着しており、それに誘引されたヒグマが複数回目撃されたが、今年度においても、6月23日および7月8日にアザラシと思われる死体が漂着し、それに誘引されたヒグマへの対応があった（写真1-20）。また、昨年度まで一部漁業者による生ゴミの不法投棄が確認されていたが、今年度においても、昆布浜北部の番屋で、漁網から洗い落とした雑魚（主にイワシ）を海岸に放置したことによってヒグマが誘引された事例があった（写真1-21）。



写真 1-19. 7 月 28 日に北浜北部の海岸でセリ科草本を採食する兄弟グマ



写真 1-20. 7 月 8 日に瀬石の浜で回収されたアザラシの死体



写真 1-21. 昆布浜北部の番屋前浜で腐敗臭を放っていた雑魚放置現場(7 月 13 日撮影)



写真 1-22. 観光客と地元住民の争いに割って入る役場職員

今年度、本地区では 6 頭のヒグマが有害捕獲された。相泊では、ヒグマの有害捕獲を強く希望する地元漁業者と、有害捕獲反対を訴える観光客との間で、激しい言い争いになるトラブルが発生した。漁業者からは、夏季の番屋生活期においては、子供も番屋に住み込むため、たとえ子グマであっても海岸まで出てくるような場合は危害が及ぶ恐れがあるとの意見があった。逆に観光客からは、世界遺産地域内で有害捕獲するのはおかしい、まして痩せた子グマを殺すのは許せない等の意見があり、両者の主張はともに感情的で激しいものであった(写真 1-22)。一時、警察を巻き込む事態にまで発展したが、当事者である観光客が羅臼町を去ったことで事態は終息し、トラブルの引き金となったヒグマは、その後も出没を繰り返したため有害捕獲となった。

8 月 31 日には、相泊の番屋で飼われている犬が襲われる事件が発生した。犬を引きずって行った経路には、血のような跡が残されており、公園羅臼線を横断して山側斜面に続いていた(写真 1-23)。その後、9 月 8 日に当該個体と疑われるヒグマが有害捕獲されたが、犬を襲ったことを裏付ける証拠は確認されなかった(写真 1-24)。



写真 1-23. 8 月 31 日に道路上に残されていたヒグマが犬を引きずった跡



写真 1-24. 9 月 8 日に道道を横断するヒグマ

●湯ノ沢町一知床峠地区

湯ノ沢町の国立公園境界から知床峠にかけての知床横断道路沿い（羅臼側）、羅臼湖歩道、および羅臼岳登山道の羅臼温泉ルートを含む当地区におけるヒグマ目撃件数は 39 件、ヒグマ対応活動は 17 件であった（昨年度は目撃 27 件、対応 8 件）。なお、本地区では、湯ノ沢町国道沿いの駐車場にヒグマへの接近および餌やりを禁止する看板を 1 基設置した。

本地区のヒグマ目撃のうち、ほぼ半数の 19 件が知床横断道路での目撃であり、それに伴う対応件数は 9 件であった。以下、場所別に特徴を述べる。

【羅臼湖歩道および知床横断道路】

羅臼湖歩道上および羅臼湖歩道入口～知床峠駐車場にかけて、0 歳子 2 頭連れの親子が複数回目撃されており、羅臼湖歩道利用者や、横断道路沿いで車を降りて不用意に接近した観光客が母グマに威嚇されるなど、危険な遭遇事例が報告された。このような出没状況を受け、羅臼湖歩道入口に注意看板を設置し（写真 1-25）、知床横断道路沿いのパトロールを実施したが、対応出動中に当該親子を発見して追い払いを実施することはできなかった。



写真 1-25. 羅臼湖入口に掲示されたヒグマ注意看板（7 月 15 日撮影）



写真 1-26. 6 月 23 日にヒグマが目撃された羅臼温泉野営場のキャンプサイト

【知床国立公園羅臼温泉野営場周辺～羅臼町民温水プール】

知床国立公園羅臼温泉野営場付近でのヒグマの出没状況は、6月23日に目撃された1件のみであったが、キャンプサイト内での目撃であったため、施設管理者の根室振興局の判断により即日（23日）閉鎖された（写真1-26）。キャンプ場の閉鎖は、周辺での目撃・痕跡がないことが確認された6月27日まで続いた。その他、羅臼研究支援センターから湯ノ沢さけますふ化場付近で国道を横断する亜成獣サイズのヒグマの目撃が4件あり、それに伴う対応出動は3件あった。

【羅臼岳登山道（羅臼温泉ルート）】

羅臼岳登山道の羅臼温泉ルートにおける今年度のヒグマ目撃は9件であった。いずれも屏風岩付近での目撃であり、緊急性の高い目撃情報ではなかったため、対応出動はしなかった。登山者とヒグマとの事故は発生しなかったが、人を見ても逃げない単独個体が屏風岩から羅臼平にかけて滞留していたようであり、登山者の通過が困難な状況もあったとの報告があった。このような人慣れグマは、来年度以降も同様の状況が発生させる可能性があるため、利用者へのさらなる注意喚起が求められる。

●羅臼市街地北側一岬町地区（鳥獣保護区内）

羅臼市街地北側（栄町、富士見町および船見町）から共栄町、海岸町、岬町を経てルサ川右岸に至る地区は、住宅地や公園羅臼線の後背に広がる町有林および国有林が鳥獣保護区にのみ指定されている（国立公園区域には指定されていない）。同地区におけるヒグマ目撃件数は129件、ヒグマ対応件数は115件であり、ともに（昨年度目撃60件、対応53件）よりも2倍以上の増加となった。なお上記の数字には、鳥獣保護区の外である海岸、道路敷、および住宅敷地内における目撃や対策活動の件数は含まれていない。鳥獣保護区と接している住宅敷地内などの隣接地域では目撃件数が33件、対応件数が55件（昨年度目撃39件、対応51件）あった。月別のヒグマ目撃・対応件数は8月が突出して多く、町内区分別では、岬町および海岸町に集中していた。



写真1-27. 北浜南部の覆道上で自然死していたメス成獣(8月30日撮影)

岬町および海岸町での目撃、対応が多かった要因は、岬町知円別地区とモセカルベツ地区および海岸町のオッカバケ川河口右岸の住宅地に複数の個体が頻繁に出没したためである。うちモセカルベツ地区およびオッカバケ川右岸の住宅地では、水産加工場や一般家庭から排出された残渣や生ゴミなどの人為的な物を食べた個体が確認された。

本地区では、29頭の問題個体が有害捕獲された（うち15頭が鳥獣保護区内での捕獲）。

これは、羅臼町全体の半数以上の捕獲頭数である。町内区分別の内訳は、岬町での捕獲が14頭（うち9頭が鳥獣保護区内）、海岸町9頭（うち4頭が鳥獣保護区内）、共栄町2頭（鳥獣保護区外）、栄町高台1頭（鳥獣保護区内）であり、残り3頭（うち1頭が鳥獣保護区内）は北浜南部で捕獲された。なお、上記捕獲個体の他、8月30日に北浜南部で自然死した個体が1頭発見された（写真1-27）。

今年度、上記地区内で特に問題となった事例を町内区分別で以下に列記し、詳述する。

【岬町】

- 1) 岬町モセカルベツ地区の水産加工場、隣接しているさけますふ化場および近隣番屋付近に頻繁に出没を繰り返した複数個体への対応事例。
- 2) 岬町知円別地区の住宅街を頻繁に徘徊した複数個体への対応事例。
- 3) 8月20日、岬町のショウジ川右岸で住民に威嚇突進したオス成獣を有害捕獲した事例。

事例1)

本事例では、7月5日～9月10日までの約2カ月の期間、水産加工場付近でヒグマ対応にあたった。当初の被害をもたらした前掌幅15cmのオス成獣は捕獲には至らなかったが、同じ水産加工場や、隣接するさけますふ化場に被害をもたらしたと推測される個体、および近隣の住宅（番屋）にとって脅威となった個体が計6頭有害捕獲された。経過は以下通りである。

期日	出来事
7月5日	岬町モセカルベツ地区の水産加工場で残渣被害を確認した（写真1-28）。現場に残された足跡は前掌幅15cmで、昨年度被害をもたらした個体と同一の可能性があったため、同日中に羅臼町役場が箱罠を設置した。
7月6日	早朝に水産加工場付近で張り込みを行うがヒグマの目撃はなかった。
7月14日	推定1歳のオスを箱罠で捕獲。前掌幅は15cm未満で、7月5日に残渣被害をもたらしたヒグマとは別個体であった。以後、箱罠は一時閉鎖された。
7月19日	同じ水産加工場の別の残渣置き場で被害が発生した。
7月22～25日	モセカルベツ地区の山側斜面で頻繁にヒグマが目撃されたため、再度箱罠を稼働させた。
7月26日	山側斜面で推定2歳のメスを捕獲した（写真1-29）。前掌幅は15cm未満であった。
8月1日	夜間、オッカバケ漁港付近で目撃された子グマ2頭連れの親子グマがモセカルベツ地区の海岸まで移動し、水産加工場の残渣入れに手を掛けているところが目撃された。

8月6日	メス成獣を箱罠で捕獲。自動撮影カメラには、罠の外にいる子グマ 2 頭が写り込んでいた（写真 1-30）。このメス成獣は、8月1日に目撃された親子グマの親の可能性があった。以後、箱罠は閉鎖された。
8月16日	山側斜面でオス成獣サイズのヒグマが目撃され、前掌幅 15 cmの足跡が確認された。
8月23日	モセカルベツ川河口右岸でオス成獣を捕獲した。前掌幅は 14 cmであった。
8月27日	水産加工場付近で単独のヒグマが目撃された。
9月5日	水産加工場に隣接するさけますふ化場の敷地内にヒグマが侵入。有害捕獲を試みたが公園羅臼線を横断して山側に逃走された。
9月6日	水産加工場で再び残渣入れが破壊される被害が発生した。この頃には以前からの被害を受けて、海岸側の建物の隙間を塞ぐように電気柵が設置されていた。同日中にモセカルベツの海岸でヒグマが出没したため有害捕獲。捕獲個体は亜成獣のオスであり、残渣入れに被害を及ぼした個体であったかは不明であった。さらに夕方、山側からさけますふ化場付近に公園羅臼線を横断したヒグマを目撃したため有害捕獲を試みたが、山側に逃走された。
9月8日	水産加工場で再び残渣入れの蓋が破壊される被害が発生した。同日夕方に水産加工場付近をパトロールするがヒグマの目撃はなかった。
9月10日	モセカルベツ地区の海岸に現れ滞留していたメス成獣を有害捕獲した。これ以降、水産加工場付近でのヒグマ目撃はなくなった。



写真 1-28. 7月5日に残渣被害現場に残されていた前掌幅 15cm の足跡



写真 1-29. 7月26日にモセカルベツ地区で有害捕獲となったヒグマ



写真 1-30. 8月6日に箱罠で捕獲されたメス成獣と2頭の子グマ

事例 2)

8 月 3 日夜、岬町知円別地区公園羅臼線山側の住宅裏でヒグマ 2 頭が目撃された。

8 月 4 日、上記の個体と同一と推測されるヒグマ 2 頭が知円別川左岸の住宅裏で目撃されたため有害捕獲を試みたが逃走された。なお、この対応中、別個体と推測される親子 3 頭も目撃された。

その後、9 月 2 日までの約 1 カ月間に、知円別地区の住宅密集地において 9 回を目撃があり、それに伴う対応があった。8 月 19 日に 2 頭を目撃があった他は、すべて単独個体を目撃であったが、当初目撃された 2 頭のうちのどちらか片方であった可能性が考えられた。すべての対応で有害捕獲を試みており、捕獲に至ることはなかったが、同日（9 月 2 日）2 度目の対応で、知円別神社横の林内に逃げ込んだ推定 2 歳のメスが有害捕獲された。さらに夕方には旧知円別小中学校に隣接する林内で推定 2 歳のメスが有害捕獲され、知円別地区の住宅密集地に出没するヒグマは目撃されなくなった。

当初目撃された 2 頭と推測される個体は有害捕獲となったが、子グマ 2 頭を連れた親子は、8 月 4 日以降この地区で目撃されることはなかった。

事例 3)

8 月 19 日早朝、岬町と北浜の境界であるショウジ川の河口において、オス成獣サイズの個体が目撃され、轟音玉および銃器を使用した威嚇弾によって追い払いが試みられた。反応は鈍く、山側に姿を消すまで何度となく立ち止まった。

同日夕方、早朝に出没したヒグマと同一個体と推測されるオス成獣がショウジ川河口に出没したため、有害捕獲を視野に入れた対応方針となった。山側斜面にいた当該個体は対策員に向かって威嚇突進してきたため、捕獲を試みたが失中し、そのまま山に逃走された。

8 月 20 日、ショウジ川河口において、19 日に出没したヒグマと同一個体と推測されるオス成獣が再び出没した。当該個体は、付近の海岸で作業中だった漁業者を追いかけるなどし、山側の住宅裏まで移動した。住宅裏で建物の窓ガラスを叩くなどした後、擁壁をよじ登って藪内に入って姿が見えなくなったが、藪の動きによって居場所は確認できていた。しばらく捕獲機会を窺っていたところ、首から上が藪から出たため頸部を狙撃し、有害捕獲となった。

【海岸町】

- 1) 海岸町飛仁帯において、住宅裏に設置された落石防護柵を利用して親子グマが 3 回エゾシカを捕食した事例。
- 2) オッカバケ川河口右岸の住宅密集地に頻繁に出没した複数個体への対応事例。

事例 1)

4 月 13 日朝、旧飛仁帯小学校グラウンド裏の山斜面で、エゾシカの残滓を採食している 1 歳 1 頭連れの親子グマが目撃され、同日午後には、旧飛仁帯小学校から岬町側 3 軒隣の住

宅裏でエゾシカを捕食する単独のヒグマが相次いで目撃された。午後に目撃されたヒグマは、同日朝に目撃された親子グマの親である可能性が高く、また、その際目撃されたヒグマは、当初エゾシカの残滓を採食していたと思われたが、生きているエゾシカを捕食していたことが明らかになった（写真 1-31）。

4 月 29 日、上記場所と同じ地点で、再びエゾシカを捕食するヒグマが目撃された。捕食場所と住宅の間には柵があり、物理的には容易に敷地内への侵入が困難な環境ではあるものの、住宅と極めて近い場所での出没であったことから、住民から有害捕獲の要望があった。その後、ヒグマが同じ場所に現れることはなかった。



写真 1-31. 4 月 13 日に落石防護柵に追い込まれヒグマに襲われたエゾシカ

事例 2)

5 月下旬、オッカバケ川河口周辺で、子グマ 1 頭連れの親子グマおよび単独のオス成獣サイズのヒグマが目撃された。うち 1 回は対応出動したが、追い払いはできなかった。

7 月 31 日、オッカバケ川河口右岸の住宅密集地に 1 歳 2 頭連れの親子グマが目撃された。すぐに対策員が出動したが、現地到着時には姿はなく、付近を搜索したが発見には至らなかった。

8 月 1 日深夜、オッカバケ漁港近くの海岸で子グマ 2 頭連れの親子グマが目撃された。この親子グマは、海岸沿いに岬町モセカルベツ地区まで移動した（岬町での事例 1 にも記述あり）。

8 月 21 日朝、右岸住宅密集地の山側に位置する住宅の横でヒグマが目撃されたが対策員の現地到着時には既にヒグマの姿はなく、目撃者も不在で詳細は不明であった。その後、天狗岩トンネル上の山斜面およびオッカバケ川河口の砂防ダムでそれぞれ異なるサイズのヒグマが目撃された。天狗岩トンネル上の個体はオス成獣サイズで、オッカバケ川方向に移動して見失ったが、砂防ダムで目撃された亜成獣サイズのヒグマに対しては追い払いを実施した。さらに夕方には、再びオッカバケ川河口右岸の住宅密集地でヒグマが目撃された。この時目撃された個体は 0 歳の子グマで、住宅街の藪を出たり入ったりを繰り返し、追い払いが困難であったため、やむなく有害捕獲となった。

0 歳の子グマが有害捕獲されてからも、オッカバケ川河口周辺では連日ヒグマが目撃されており、オッカバケ漁港内で泳いでいる姿も目撃されていた。

8 月 24 日朝、オッカバケ漁港内に侵入したメス成獣が有害捕獲された。この対応時、付近の住民から、天狗岩パーキングで車中泊している釣り人による、朔北橋からのゴミの投棄が指摘された。

8 月 30 日夕方、オッカバケ川河口右岸の住宅密集地で、ヒグマが 2 回目撃された。どちらも追い払いを実施し、山側に逃走して行ったが、同日の深夜にも住宅のすぐ横を徘徊し

ているヒグマが目撃された。この出沒時、屋外に放置された生ゴミが食べられていたことが明らかとなった。

9月6日、オッカバケ川河口右岸の住宅密集地でヒグマが3回目撃された。その都度対応出動していたが、対策員が現地に到着する前に逃走してしまうなど、頻繁に出沒するものの、有害捕獲には至らなかった。

9月7日、前日（6日）の出沒状況を受けて、早朝から付近のパトロールを実施した。日中、山側の藪が不自然に動いていたためヒグマの存在が疑われたが、姿を確認することはなかった。

9月8日夕方、オッカバケ川右岸の住宅密集地でエゾシカと睨み合う亜成獣サイズのヒグマが目撃された。直ちに対策員が現場に向かったが、エゾシカの姿しかなく、既に逃走していた後であった。その後、事例1)のモセカルベツ地区のヒグマ出沒現場をパトロールしていたところ、再び住宅密集地に姿を現したため急行し、有害捕獲となった。

④まとめ

1) 平成24年度のヒグマ出沒状況について

今年度は国立公園および鳥獣保護区内だけでなく、知床半島全体でヒグマの出沒が著しく多かった。斜里町および羅臼町では過去に例のない出沒件数（以下、大量出沒とする）を記録し、特に羅臼町ではヒグマの有害捕獲数が過去最多となった。今年度の大量出沒の理由は正確には分かっていないが、気候の影響によりヒグマが一時的に深刻な食物不足に陥った可能性が示唆された。背景に食物不足があったことは、痩せたヒグマが目撃されたことや、ヒグマの自然死個体が複数発見されたことから推測される。また例年ヒグマ出沒のピークは7月であったが、今年は8月がピークとなった。8月の公園内の道路沿いではヒグマが執拗にアリを採食する姿が確認されており、ヒグマはアリで飢えを凌いでいるとも見てとれた。知床五湖では過去の傾向から8月以降はヒグマの出沒が収束すると予想されていたが、今年は逆に8月にヒグマの出沒が多くなり、地上遊歩道の閉鎖が相次いだ。大量出沒の原因が気象条件による食物不足だとすれば、このような事態は再び発生する懸念がある。

2) ルサ - 相泊地区の電気柵について

羅臼側のルサー相泊間では、昨年度からダイキン工業株式会社からの寄付を受けた羅臼町が、野生鳥獣対策フェンス設置事業を実施しており、これは、住民生活圏とヒグマ行動圏との物理的隔離を目的としている。昨年度は、昆布浜に総延長 750m の二重電気柵が設置され、当財団が羅臼町からの委託業務として、野生鳥獣対策フェンスの設置作業とその侵入防止効果を検証した。上記モデル区間においては、例年ヒグマの目撃とそれに伴う対応が散発的に発生していたが、今年度においては、同区間でヒグマの目撃はなく、対応も

なかった。隣接した場所での目撃および対応はあったものの、その件数はわずかであり、電気柵に一定の効果があったと考えられた。

今年度事業では、昆布浜の既存電気柵からルサ川左岸にかけての擁壁に、電気柵が増設された。増設区間の完成はヒグマの出没がなくなった後の 11 月 24 日だったため、設置後の効果検証は来年度に持ち越されることとなった。これまで羅臼側では電気柵の設置が局所的であり、斜里側のウトロ地区のように大規模なものはなかった。今後は羅臼側でも電気柵を活用したヒグマ対策効果が期待される。

3) ヒグマの人慣れと危険事例

今年度もヒグマによる人身事故は発生しなかった。しかし結果的に人身事故が発生しなかっただけで、発生する可能性は十分にあったと考えられる。ヒグマが建物や船舶へ侵入した事例、飼い犬がヒグマに連れ去られた事例など、もし人が居合わせていれば非常に危険であった。近年、公園内では人を見ても逃げない人慣れ個体が増えている可能性がある。知床五湖の高架木道のような長大な構造物にもすでに馴化したヒグマが確認された。ヒグマは速やかに新しい環境に順応していると考えられる。しかし人間側の対応は迫いついているとは言い難い。餌付けやゴミの管理といった人間側のマナーやモラルは未だ不十分な状況である。

国立公園および鳥獣保護区は住民の生活エリアと隣り合っており、言わば人とヒグマが隣り合って生活している状況である。ヒグマが人の存在に慣れれば、住民の生活エリアに進出してくる可能性も高くなり、人為物を食べる機会も増える。国立公園内ではヒグマが出没すればすぐに渋滞が発生し、人だかりができるような状況が頻繁に発生した。また過剰にヒグマに接近して撮影するカメラマンも後を絶たない。一方で住宅地にヒグマが侵入すれば有害捕獲の対象となる。今年確認された有害捕獲を望む地元住民と有害捕獲を反対する観光客とのトラブルは、ヒグマとの共生の困難さを象徴している。

住民と観光客両方の意識を変えていく普及啓発は今後とも必要であるが、社会に変化を求めるのは容易なことではなく多大な努力と時間が必要である。現段階では今実施しているヒグマ対策を継続し、ヒグマの人慣れを防止すると共に、もし問題個体が出現した場合は速やかに対処できる体制を維持するべきと考えられる。

4) 近年におけるヒグマ出沒と対応状況について

今年度のヒグマ出沒状況および対応状況を過去と比較するため、過去 6 年間の国立公園および鳥獣保護区におけるヒグマ目撃件数と対応件数および有害捕獲頭数を表 1-11 に示した。過去 5 年間と比較し今年度は目撃件数・対応件数・有害捕獲頭数すべてが著しく増加した。斜里側では目撃件数が年間 1,000 件を超えたのは初めてのことである。羅臼側では平成 20 年度以降、目撃件数が増加し続けており、今年度の目撃件数は過去最多となった。ヒグマ目撃件数の増加に伴い、当財団のヒグマ対応件数も例年の 2 倍以上となった。

表 1-11. 国立公園および鳥獣保護区における過去 6 年間のヒグマ目撃情報および対応状況

年度	目撃件数			対応件数			有害捕獲頭数		
	斜里側	羅臼側	合計	斜里側	羅臼側	合計	斜里側	羅臼側	合計
平成19	656	85	741	400	58	458	3	7	10
平成20	750	75	825	409	56	465	1	9	10
平成21	654	100	754	362	56	418	2	7	9
平成22	509	140	649	311	68	379	0	7	7
平成23	759	192	951	388	115	503	2	4	6
平成24	1,702	280	1,982	823	177	1,000	4	20	24

過去 6 年間の目撃件数を地区別に示したのが表 1-12 である。斜里側では例年、幌別・岩尾別地区の目撃件数が全体の過半数以上を占めている。今年度は幌別・岩尾別地区以外に知床五湖園地地区と幌別川ーオペケブ川地区で例年より著しく目撃件数が多く、2 倍以上となった。羅臼側では、ルサー知床岬地区の目撃件数が連年多くなっている。羅臼市街地北側ー岬町地区は平成 23～24 年度で急増している。

地区別の目撃件数は、年ごとに多少の変動はあるが、幌別川ーオペケブ川地区や羅臼市街地北側ー岬町地区といった、人の生活エリアに隣接した地区での目撃件数が近年増加傾向にある。

国立公園外を含んだ斜里町および羅臼町のヒグマ目撃件数の推移を図 1-8 と 1-9 にそれぞれ示す。今年度の斜里町のヒグマ目撃件数は、データを取り始めた平成 5 年度以降、最多であった平成 17 年度（857 件）を優に追い越し新記録の 1,764 件となった。また羅臼町のヒグマ目撃件数はデータを取り始めた平成 19 年度以降、増加傾向となり、今年度の目撃件数が最多の 387 件となった。過去 6 年間を比較してみる限り、両町のヒグマの出没状況は、増加傾向にある。これは国立公園だけでなく国立公園外でも同じ傾向にあると考えられる。

今年度は食物不足によってヒグマの出没件数が増加した特異的な年と言えるかもしれない。しかし来年度以降がどのような状況になるか予測することは困難であり楽観視はできない。

表 1-12. 国立公園および鳥獣保護区における過去 6 年間の地区区分別目撃件数の推移

地区区分	年度(平成)					
	19	20	21	22	23	24
斜里側						
幌別・岩尾別地区	456	567	469	330	455	1192
知床五湖園地地区	52	45	58	70	58	198
イダシュベツ・カムイワッカ地区	52	33	57	36	90	85
知床連山登山道地区	26	30	32	21	60	56
知床横断道地区	11	22	25	16	33	42
知床岬地区	6	6	0	10	13	4
幌別川ーオペケプ川地区	53	47	13	26	50	125
小計	656	750	654	509	759	1702
羅臼側						
ルサー知床岬地区	19	38	57	99	105	112
湯ノ沢町ー知床峠地区	35	15	20	23	27	39
羅臼市街地北側ー岬町地区	31	22	23	18	60	129
小計	85	75	100	140	192	280
総計	741	825	754	649	951	1982

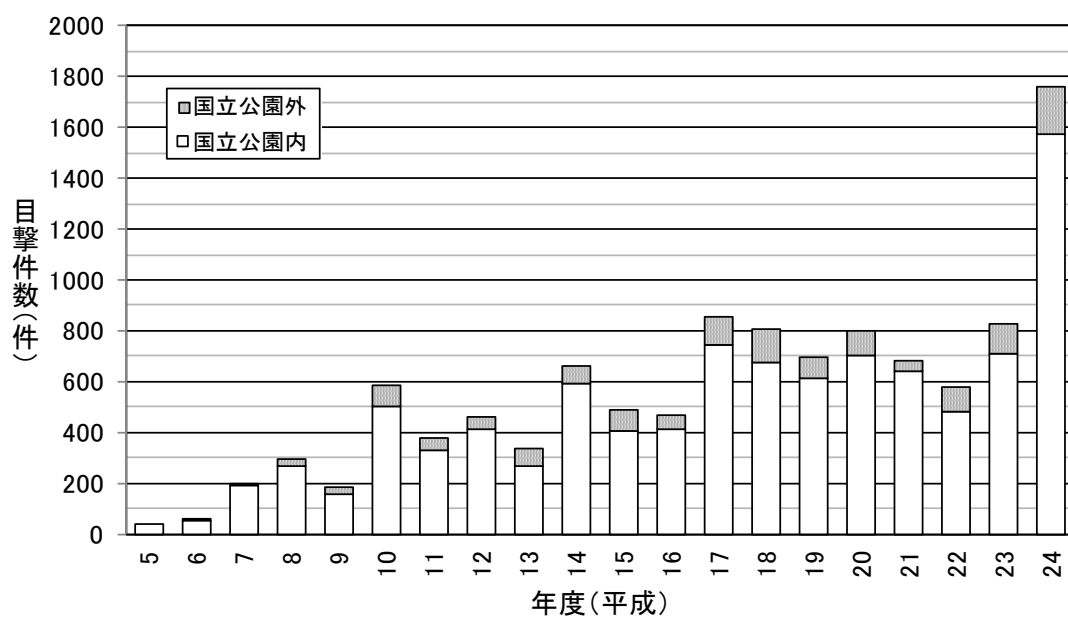


図 1-8. 斜里町におけるヒグマ目撃件数の推移

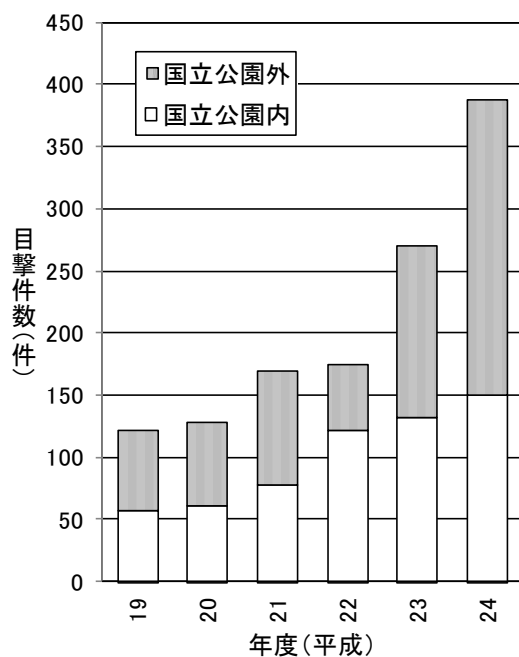


図 1-9. 羅臼町におけるヒグマ目撃件数の推移

表 1-13 に過去 6 年間ににおける特筆すべきヒグマ出没事例と、国立公園内での主な出来事等を年表としてまとめた。国立公園内の施設や利用状況は近年大きく変化している。特に知床五湖地区では、新施設の設置や利用調整地区制度導入などの変化があった。

この 6 年間で、偶発的なヒグマとの遭遇や人慣れ個体の出現、食料やゴミにヒグマが誘引された事例は、毎年のように発生している。そのためヒグマの追い払いや普及啓発など、基本的な対策を今後も継続していく必要がある。

表 1-13. 過去 6 年間における斜里町・羅臼町のヒグマ管理対策に関する出来事

年	斜里町・羅臼町におけるヒグマ出没状況(特記事項)	知床国立公園内の主な出来事	その他の主な出来事
2007年 (平成19年)	・フレベの滝遊歩道でヒグマが利用者の近くでシカを追いかけける事例が複数回発生。 ・五湖地上遊歩道で観光客がヒグマに威嚇される事例が発生。 ・岩尾別温泉のホテルのゴミ箱がヒグマに荒らされる事例が発生。 ・ヒグマを追い払い中のヒグマ対策員が轟音玉で負傷する事例が発生。 ・カムイワッカでヒグマが頻繁に出没し、利用者がバスに一時退避する事例が発生。	・環境省が新・羅臼ビジターセンターを開設。 ・「カムイワッカ地区でヒグマが出没した際の対応方針」を関係機関が取りまとめる。	・知床財団に羅臼地区事業係が新設され、新・羅臼ビジターセンターを拠点に活動開始。 ・羅臼町が知床財団にヒグマ管理対策業務の委託を開始。 ・斜里町がウトロ市街地を囲う柵を設置。
2008年 (平成20年)	・真鯉のエゾシカファームにヒグマが侵入しシカを捕食する事例が発生。 ・国設羅臼温泉キャンプ場で、人が入っている状態のテントがヒグマに破られる事例が発生。根室支庁が同キャンプ場の一部に電気柵を設置。 ・羅臼岳登山道で登山者がヒグマに威嚇突進され転倒する事例が発生。 ・漁業番屋の番犬がヒグマに叩かれ瀕死の重傷を負う事例が発生。 ・岬町～海岸町にかけて魚目当てにヒグマが物置を荒らす事例が発生。		・「知床国立公園先端部地区利用の心得」の策定。 ・幌別駐車帯が、ヒグマの出没が頻繁という理由で、夏期から秋期にかけて閉鎖される。後年も実施されるようになる。
2009年 (平成21年)	・ウトロ東でヒグマが物置の戸を破壊する事例が発生。 ・知床岬を目指すトレkkerが念仏岩でテントと食料をヒグマに荒らされる事例が発生。これを受け関係機関が海岸トレッキングの自粛を要請。 ・知床峠付近で利用者がヒグマに約1mまで接近される事例が発生。	・知床五湖で高架式木道が第2展望台まで延長される。 ・環境省が羅臼町北浜にルサフィールドハウスを開設。	・環境省がウトロ地区に知床世界遺産センターを開設。
2010年 (平成22年)	・羅臼岳登山道でヒグマがエゾシカを捕食する事例が発生。関係機関が登山道利用の自粛を要請。 ・相泊～知床岬間を巡視中の環境省職員が、負傷したヒグマに威嚇突進を受け、転倒し軽傷を負う事例が発生。 ・崩浜付近をトレッキング中の観光客の犬がヒグマに襲われ、逃げる犬を追ってヒグマが飼主主に急接近する事例が発生。 ・斜里町市街地に親子グマ2頭が出没し駆除される事例が発生。役場に全国から苦情が殺到。	・知床五湖で高架式木道が第3展望台まで延長される。 ・五湖地上遊歩道で知床五湖利用コントロール導入実験が約1カ月間実施される。	・知床半島ヒグマ保護管理方針の検討が始まる。
2011年 (平成23年)	・秋期にウトロ市街地でヒグマの出没が相次ぐ。ウトロ東の民家ベランダにヒグマが侵入する事例が発生。 ・斜里市街地近くにヒグマが連続出没。防風林林縁などに電気柵が設置される。 ・羅臼町のヒグマ目撃件数が過去最多となる。 ・羅臼町海岸でトドの死亡漂着が相次ぎ、ヒグマが誘引される事例が発生。 ・秋期に共栄町～岬町にかけて干し魚を奪われる事例が複数回発生。	・環境省が知床五湖フィールドハウスを開設。五湖地上遊歩道で利用調整地区制度が導入される。 ・知床公園線の五湖～カムイワッカ区間で一部の期間、一般車両の通行が可能になる。 ・硫黄山登山道が利用可能となる。 ・ダイキン工業からの寄付を受けた羅臼町によって昆布浜地区に電気柵が設置される。	・知床岬地区にエゾシカ捕獲用の仕切り柵が設置される。
2012年 (平成24年)	・斜里町でのヒグマ目撃・対応件数が過去最多となる。 ・ウトロ漁港に停泊中の漁船にヒグマが侵入。 ・羅臼町でのヒグマ目撃・対応件数および有害捕獲頭数が過去最多となる。 ・羅臼町で警察官職務執行法第4条第2項が適応された事例が発生(警察官の命令による日没後発砲)。 ・1990、1992、1999年に学術捕獲されていた個体「通称:ローズ」が羅臼町で有害捕獲となった。 ・知床の痩せグマがマスコミで話題となる。 ・ヒグマの自然死体が複数発見される。		・知床半島ヒグマ保護管理方針の運用が始まる。

5) ヒグマ対策と知床半島ヒグマ保護管理方針について

知床世界自然遺産地域科学委員会では、平成 22 年度から斜里町と羅臼町及び標津町を含む知床半島全域を対象としたヒグマについての保護管理方針が検討され、同方針は平成 24 年度から運用されることとなった。ヒグマ保護管理方針ではゾーニングによる地域区分とヒグマの行動段階区分によって対応内容を判断する方法が採られている。ヒグマの出没場所だけでなく、その個体の行動が判断基準として重要となっている。ゾーンマップとヒグマの行動段階の定義を図 1-10 と表 1-14 にそれぞれ示す。ゾーニングでは 1 が最もヒグマに対し寛容なエリアで、逆に 5 が最も厳しいエリアである。行動段階区分では段階 0 のヒグマが最も危険性が低く、段階 3 が最も危険性が高い個体であると判断される。出没したヒグマは出没場所と行動によってカテゴリー分けされ、ヒグマ対策員はそれに対応した対策を実施する。ヒグマが出没しても危険性が認められなければ何も実施しないが、危険性が極めて高ければ有害捕獲といった方策がとられることとなる。

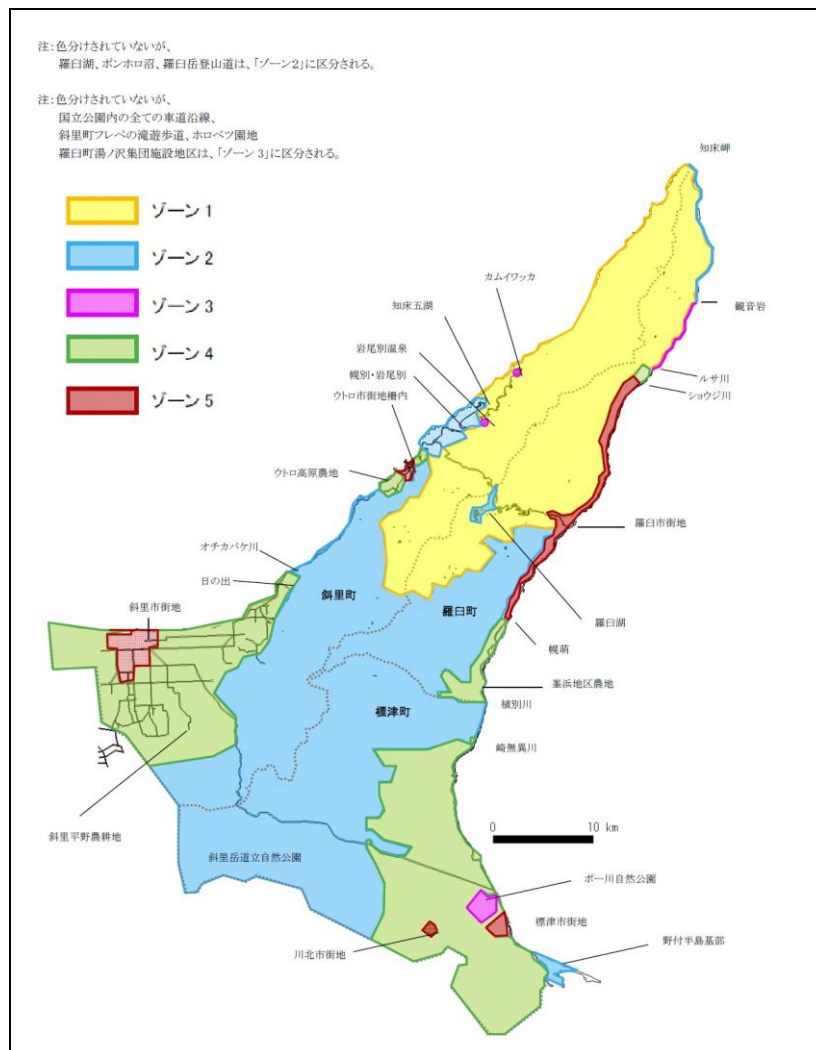


図 1-10. 知床半島ヒグマ保護管理ゾーニング

表 1-14. ヒグマの行動段階区分の判断基準

段階	有害性	人に対するヒグマの行動	人為的食物の採餌や、 人の財産・所有物に対するヒグマの行動
3	大 ↓ 小	人につきまとう、または積極的に人を攻撃する (iii)	I または II
2		i または ii	人為的食物を食べた、あるいは農作物や漁獲物、 人の財産・所有物に実害を与えた (II)
1		人を避けない一人との遭遇を気にせず遭遇しても慌 てて逃げていくような行動が見られない (ii)	人為的食物 (生ゴミや農作物など) を食べていな い、また人の財産・所有物に実害を与えていない (I)
0		人を避ける一人との遭遇を積極的に避け、仮に遭 遇してもヒグマの方から逃げて行く (i)	

今年度において実施したヒグマ対応件数をゾーン別とヒグマ行動段階別に集計したものが表 1-15 (斜里側)、1-16 (羅臼側) である。斜里側では 330 件、羅臼側では 161 件の事例においてヒグマの行動段階を区分した。両町とも段階 1 のヒグマの出没が最も多く、全体の 9 割以上を占めた。段階 3 のヒグマの出没は確認されなかったが、段階 2 は斜里側で 5 件、羅臼側で 6 件確認された。

ゾーン別に比較すると、斜里側ではゾーン 3 の出没事例が最も多く全体の 86% を占め、羅臼側ではゾーン 5 の出没事例が最も多く全体の 58% を占めた。これは斜里側と羅臼側の住宅地の配置や土地利用の在り方が異なり、ゾーンの配置に明確な違いがあるためと考えられる。羅臼側では住宅地のすぐ裏が町林 (鳥獣保護区) になっているような、ゾーン 5 が多く、そのためヒグマがゾーン 5 で目撃される事例が多かった。

表 1-15. 平成 24 年度の国立公園および鳥獣保護区内 (斜里側) において実施したヒグマ対策件数のゾーン別・行動段階別集計

ゾーン	行動段階				合計
	0	1	2	3	
1	0	1	0	0	1
2	2	21	0	0	23
3	8	271	4	0	283
4	1	20	0	0	21
5	0	1	1	0	2
合計	11	314	5	0	330

※痕跡のみや 2 次情報のみなどヒグマの行動段階が不明なものは除く。

表 1-16. 平成 24 年度の国立公園および鳥獣保護区内(羅臼側)において実施したヒグマ対策件数のゾーン別・行動段階別集計

ゾーン	行動段階				合計
	0	1	2	3	
1	1	1	0	0	2
2	1	1	0	0	2
3	1	44	2	0	47
4	0	17	0	0	17
5	5	84	4	0	93
合計	8	147	6	0	161

※痕跡のみや 2 次情報のみなどヒグマの行動段階が不明なものは除く。

なおヒグマ保護管理方針では、出没個体の行動履歴が蓄積されている場合には、保護管理対策を選択する際にその履歴を考慮する、とある。つまり問題行動を起こした危険度の高いヒグマを個体識別できれば、行動履歴から有害捕獲の判断等ができる。例えば今年度、建物に侵入したヒグマのような問題個体を個体識別し、別の場所に出没した際に捕獲するといった方法が考えられる。しかし現状では野外において野生のヒグマの個体識別を行うのは困難である。確実なのは生体捕獲して標識を付けることであるが、知床半島のすべてのヒグマに標識を付けるのは現実的ではない。現状では出没したヒグマに対し、その都度行動段階を判断するしかないが、将来的には野外における個体識別の確実な方法を開発することが望まれる。具体的には現在知床で実験的に実施されているカメラトラップやダーツバイオプシー等の応用が考えられる。

同管理方針では知床のヒグマ個体群を現行水準で維持することを方針としており、5 歳以上のメス成獣の人為的死亡頭数に制限を設けるといった具体的な目標が示されている。今年度は同管理方針の運用 1 年目であるが、ヒグマの大量出没が発生し、有害捕獲数が過去最多となった。知床のヒグマの個体数や増減の傾向は、科学的データが不十分であることから明確になっていないが、今年度の死亡頭数は知床半島のヒグマ個体群に少なからず影響を与えたと考えられる。重要なのは、なぜ大量出没が起こり今年度の死亡頭数が知床のヒグマ個体群にどの程度影響を与えたのか、科学的に分析し因果関係を明らかにすることである。そのためには死亡した個体のサンプルをできる限り収集し詳細に分析する体制が必要である。同管理方針は 5 年を 1 期とし、5 年毎に見直しを行うとある。次の見直しまでの 4 年間でどのような状況になるか分からないが、今年度の状況を確実に第 2 期の見直しに反映させる必要があるであろう。

ヒグマ目撃アンケート

幌岩・五湖・イカム・連山・横断道・岬・ウトオシ・その他

ヒグマに対する安全対策のための貴重な資料になりますので、
お手数ですがご協力ください。
該当する選択肢に○印をつけ、必要な項目を記入ください。



No. _____

親仔（0歳2頭連れ）の例

- 1: ヒグマを見た日時？ _____ 年 _____ 月 _____ 日 午前 / 午後 _____ 時頃
- 2: ヒグマがいた場所は？ その場所を別紙地図に×印をつけて示してください。→ 裏面の地図へ
また、おおよそ地名を記入して下さい【 _____ 】
- 3: その時、クマとあなたとの距離はどのくらいでしたか？ → 約 _____ メートル
- 4: クマの頭数は？ （1）単独 （2）親仔連れ （3）複数 _____ 頭

あ: クマの大きさは？ _____ （例：C×1, A×2など）

い: 仔クマの大きさは？ _____



人は大人男性（身長170cm）
を基準にしています。

5. クマは何をしていましたか？ （1）移動していた （2）立ち止まっていた （3）うろうろしていた
（4）木に登っていた （5）何かを食べていた （6）その他 _____
6. クマの特徴は？

〔記入例〕



首輪	有 / 無
耳タグ色	左 _____ 右 _____



首輪	有 / 無
耳タグ色	左 _____ 右 _____

7. あなたは何をしていましたか？ （1）歩いていた （2）立ち止まっていた （3）走っていた
（4）車の中にいた。 （5）その他 _____
8. クマはあなたに気づきましたか？ （1）気づいていた （2）気づかなかった （3）不明
9. クマに気づいて、あなたはどうしましたか？ （1）静かにしていた、 （2）小さな物音を立てた
（3）大きな物音／声を立てた （4）その他 _____
10. その後のクマの反応は？ （1）じっとしていた （2）逃げていった （3）ゆっくり立ち去った （4）近づいてきた
（5）うなった （6）怒ったように向かってきた （6）その他 _____
12. クマ遭遇に対する対策をとっていましたか（徒歩の人のみ）？ （1）鈴を鳴らしていた （2）声を出していた
（3）対策をとっていなかった （4）その他 _____

目撃者の名前（任意） _____

ご協力たいへんありがとうございました。

スタッフ記入欄

受付施設: _____ 受付日: _____ 鳥獣保護センター回収日: _____ 回収者: _____ 対応: あり/なし

資料編 1-2. ホームページによるヒグマ情報発信例


[English](#) | [中文\(簡体\)](#) | [お問い合わせ](#) | [sitemap](#) | [link](#) | [採用情報](#)



知床自然センターは知床財団が管理運営をしています。

MENU

[ホーム HOME](#)
[組織概要 ABOUT US](#)
[ご案内 INFORMATION](#)
[自然 NATURE](#)
[サポーター SUPPORTER](#)

SEEDS
コラム



◀ 今年の知床クマ事情① | メイン | 「シホテ・アリン」に行ってきました① ▶

2012年11月24日

●今年のクマ事情②

一層縮まる人とクマの距離

前編で今年の出没傾向やクマの様子がいつもと違ったこと、夏場の餌事情が厳しかったことがその原因の一つだった可能性を紹介した。例年に比べて突出して多い目撃数は、今年の特別な状況に起因していると考えられるが、一方で今年に限らず、目撃数自体が年々増加傾向にあることは確かで、その背景に人を気にしないクマの存在がある。全てのクマが人を気にしなくなったわけではないが、確実に増加している。



人側のクマに対する反応が変わりつつある。人もクマを恐れなくなった気がする。特に国立公園内では、道路際にクマがいると、たちまち車の渋滞が発生し、車外に出てカメラを構える人々にクマは囲まれる。知床財団でお過度の人慣れを防ぐために追払いを行っているが、それはクマにとって人との出会いのほんの一部でしかなく、追払いによる学習付けには限界がある。



人に対して寛容であることは、突発的な人との出会いといった通常なら危険な状況でも、威嚇防御さらには攻撃といった行動への閾値が高くなり、結果的に事故へつながる確率は低下する。しかし一方でその寛容さが人とクマの距離を縮めることで、人の生活圏への接近や侵入を助長する。さらにクマに対する人側の問題行動(例えば、接近、餌付け、挑発など)にクマが接する機会を増やすことにもなる。結果的に人にとって悪いクマ、つまり人の所有物を奪ったり、破壊したり、人や家畜、ペットを傷つけたりするようなクマに変える確率は逆に上昇する。前者は良いとしても、後者はクマにとっても人にとっても悲劇的な結末を生む。

カテゴリー

増田事務局長のつぶやき [3]
山中事務局長のつぶやき [3]

リンク

① 知床の旬の自然情報

① 知床財団の活動報告

① イベント・ボランティア
活動参加者募集

① 知床自然教室
子どもたちがヒグマの棲む森で遊ぶ

① SEEDSコラム

月別リスト

過去の記事を読む ▼

ここはヒグマの生息地

Bear Country / 這裡是棕熊的生息地 / 此处是棕熊的栖息地 / 이곳은 큰곰 서식지입니다



近づかない！

Do not approach! / 不要靠近! / 切勿接近! / 다가가지 마세요!

食べ物を与えない！

Do not feed! / 不要給餵食! / 請勿給投放食物! / 먹이를 주지 마세요!

環境省 / 北海道 / 斜里町
Ministry of Environment / Hokkaido / Town of Shari

製作協力 知床財団

ここはヒグマの生息地

Bear Country / 這裡是棕熊的生息地 / 此处是棕熊的栖息地 / 이곳은 큰곰 서식지입니다



近づかない！

Do not approach! / 不要靠近! / 切勿接近! / 다가가지 마세요!

食べ物を与えない！

Do not feed! / 不要給餵食! / 請勿給投放食物! / 먹이를 주지 마세요!

ヒグマを目撃した方は、羅臼町役場まで情報をお寄せ下さい。

TEL: 0153 - 87 - 2126

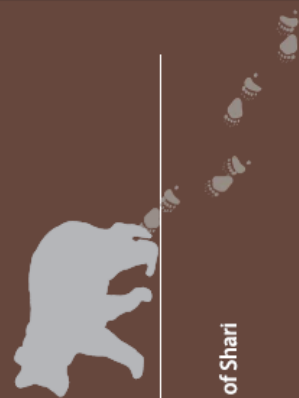
環境省 / 北海道 / 羅臼町

Ministry of Environment / Hokkaido / Town of Rausu

製作協力 知床財団

ヒグマがいます！ あなたは大丈夫？

- 知床は全域がヒグマの生息地です。
ヒグマが人前に姿を見せることも珍しくありません。
フレペの滝遊歩道を利用する際は、以下の注意事項を必ずお守り下さい。
- ❖ 早朝・夕方・霧などで視界が悪いときは立ち入らない。
 - ❖ ゴミ捨て、食料の持ち込みは禁止。
 - ❖ 犬を連れて立ち入らない。
 - ❖ ヒグマに人の存在を知らせるため、頻繁に物音や声を出しながら歩く。
 - ❖ ヒグマに出会ったら、騒がず、走らず、ゆっくり後退。絶対に近づかない。
 - ❖ ヒグマに食べ物を与えない。
- ヒグマを目撃した方は、知床財団 (TEL : 0152-24-2775) まで情報をお寄せ下さい。



環境省 / 北海道 / 斜里町
Ministry of Environment / Hokkaido / Town of Shari

ヒグマ注意看板 (C) : 外国語表記 (上) と日本語表記 (下)

Bear Country

這裡是棕熊的生息地 / 此处是棕熊的栖息地 / 이곳은 큰곰 서식지입니다

The whole area of Shiretoko Peninsula is a habitat for brown bears. Please comply with the following rules for your personal safety in this area.

知床是日本棕熊的「家」。在知床有可能遇到日本棕熊。遊客利用乙女瀑布的散步道時，請遵守以下規則。/ 知床是日本棕熊的「家」。此外在知床，有可能會遇到日本棕熊。遊客利用乙女瀑布的散步道時，請遵守以下規則。/ 시레토코는 큰곰이 사는 곳입니다. 이곳에서는 큰곰과 마주칠 수도 있습니다. 후레페 폭포 산책로를 이용할 때는 다음 규칙을 지켜 주십시오.

Do not enter at early morning, evening, or during low visibility conditions.

熊見度低時(夜間・清晨)請不要進入。/ 和野不清晰時(傍晚至早上)，請勿進入。/ 시아가 나를 때(저녁-아침)은 들어가지 마십시오.

Do not litter. Do not take food into this area.

禁止亂扔雜物。請不要帶食物。/ 禁止亂丟垃圾。請勿攜帶食物進入。/ 쓰레기 투기 금지. 음식물 반입하지 마십시오.

Do not bring dogs into this area.

請不要帶狗進入。/ 請勿帶狗進入。/ 개를 데리고 들어가지 마십시오.

Make noise or talk loudly while walking.

走路時請發出響動或聲音。/ 請走路時發出响動或声音。/ 소리를 내면서 다니십시오.

If you encounter a bear, do not run away as this often triggers the bear's instinct to chase. Be calm and slowly move away from the bear.

如果遇上了棕熊怎麼辦? 不要跑。不要慌張。慢慢後退。注意不要刺激到棕熊。/ 如果遇到棕熊怎么办? 不要慌張。慢慢離開現場。以免刺激棕熊。/ 만약 큰곰을 만나면? 달리지 마세요. 허둥대지 마세요. 큰곰을 자극하지 않도록 천천히 후퇴.

Do not feed. Do not touch bears.

不要給熊餵食。/ 請勿給熊餵食。/ 먹이를 주지 마세요.

Please report all bear incidents and encounters to the staff at Shiretoko Nature Foundation (TEL : 0152-24-2775).

請向看到棕熊的人。請將情報告訴知床財團。/ 向看到棕熊的人，請將情報告訴知床財團。/ 큰곰을 목격하신 분은 시레토코재단에 정보를 보내주시기 바랍니다.

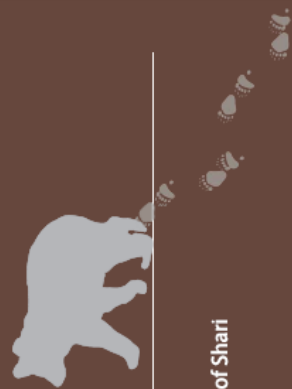
製作協力 知床財団

ヒグマがいます！ あなたは大丈夫？

知床は全域がヒグマの生息地です。
ヒグマが人前に姿を見せることも珍しくありません。
カムイワッカ湯の滝を利用する際は、以下の注意事項を必ずお守り下さい。

- ❗ 早朝・夕方・霧などで視界が悪いときは立ち入らない。
- ❗ ゴミ捨て、食料の持ち込みは禁止。
- ❗ 犬を連れて立ち入らない。
- ❗ ヒグマに人の存在を知らせるため、頻繁に物音や声を出しながら歩く。
- ❗ ヒグマに出会ったら、騒がず、走らず、ゆっくり後退。絶対に近づかない。
- ❗ ヒグマに食べ物を与えない。

ヒグマを目撃した方は、知床財団（TEL：0152-24-2775）まで情報をお寄せ下さい。



環境省 / 北海道 / 斜里町
Ministry of Environment / Hokkaido / Town of Shari

ヒグマ注意看板（D）：外国語表記（上）と日本語表記（下）

Bear Country

這裡是棕熊的生息地 / 此处是棕熊的栖息地 / 이곳은 큰곰 서식지입니다

The whole area of Shiretoko Peninsula is a habitat for brown bears. Please comply with the following rules for your personal safety in this area.

知床是日本棕熊的「家」。在這裡有可能會遇到日本棕熊。請遵守以下規則。/
知床是日本棕熊的「家」。此外在知床，有可能會遇到日本棕熊。請遵守以下規則。/
シレトコ半島は棕熊の生息地です。 이곳에서는 큰곰과 마주칠 수도 있습니다. 이용할 때는 다음 규칙을 지켜 주십시오.

❗ Do not enter at early morning, evening, or during low visibility conditions.
熊見度低時（朝晩・薄暮）請不要進入。/ 視野不清時（傍晚至早上），請勿進入。/
시아가 나쁠 때(저녁-아침)는 들어가지 마십시오.

❗ Do not litter. Do not take food into this area.
禁止亂扔雜物。請不要帶食物。/ 禁止帶食料。請勿攜帶食物進入。/
쓰레기(특기)금지.음식을 반입하지 마십시오.

❗ Do not bring dogs into this area.
請不要帶狗進入。/ 개를 데리고 들어가지 마십시오.

❗ Make noise or talk loudly while walking.
走路時請發出響動或聲音。/ 請走路時發出响動或声音。/ 소리를 내면서 다니십시오.

❗ If you encounter a bear, do not run away as this often triggers the bear's instinct to chase. Be calm and slowly move away from the bear.

如果遇上了棕熊怎麼辦？不要跑。不要慌張。慢慢後退。注意不要刺激到棕熊。/
如果遇上了棕熊怎麼辦？不要跑。不要慌張。慢慢後退。注意不要刺激到棕熊。/
如果遇到棕熊怎么办？不要硬跑动，不要慌失措，慢慢离开现场，以免刺激棕熊。/
만약 큰곰을 만나면? 달리지 마세요. 허둥대지 마세요. 큰곰을 자극하지 않도록 천천히 후퇴.

❗ Do not feed.
不要給熊食。/ 請勿給熊投食物。/ 먹이를 주지 마세요.

Please report all bear incidents and encounters to the staff at Shiretoko Nature Foundation (TEL: 0152-24-2775).

請將所有棕熊事件及遭遇報告給知床財團。/ 亲眼看到棕熊的人，請將情報告訴知床財團。/
큰곰을 목격하신 분은 시레토코재단에 정보를 보내주시기 바랍니다.

製作協力 知床財団

2. ヒグマに関する情報収集

2-1. ヒグマ個体群の動向把握のための手法の検討と試行

知床におけるヒグマ個体群の動向を把握するため、調査手法を検討するとともに試行した。

○調査手法の検討

ヒグマ個体群の動向把握には、長期にわたり定期的の実施する必要があるため、下記の条件を考慮する必要がある。

- ・実施場所への立ち入りが容易であること。
- ・今後とも実施場所に変更がないこと。
- ・人為的な影響が少ない場所であること。
- ・調査員が異なっても実施可能な簡便な内容の調査であること。
- ・実施年による違いを比較可能な程度のヒグマに関する情報が収集できること。

そこで、冬期通行止めの道道知床公園線知床五湖ゲートから知床大橋間を対象として、初冬に道路上に雪が積もった翌日に、車両での通行に問題が無いことを確認した上で、雪上のヒグマの足跡を確認するという調査を2回実施した(11月30日以降は積雪のため車両での通行が困難となった)。ヒグマの足跡を発見した場合には、GPSで位置情報を記録し、車両を停車して単独、あるいは子連れのヒグマであるのかの確認を行うとともに、前掌幅を計測した。隣接した場所に足跡があった場合には、足跡から推測される進行方向やそれぞれ計測した前掌幅サイズを考慮して、同一個体か否かを判断した。

○実施概要

1回目

実施日：平成24年11月19日

時間：13:15～14:20

天候：晴れ

積雪深：2.2cm

2回目

実施日：平成24年11月29日

時間：09:30～11:20

天候：晴れ

積雪深：13.0cm

ヒグマの足跡は、1 回目に 5 箇所、2 回目に 8 箇所について確認された（表 1-17）。

1 回目の調査で確認されたのは足跡から、5 箇所ともに単独行動をしているヒグマであった。前掌幅のサイズは 12.5～15.0cm であった。確認された場所は、硫黄山登山道の入り口付近で 3 箇所と多かった（図 1-11）。

2 回目の調査で確認された 8 箇所のうち 1 箇所のみで子 1 頭連れの親子と判断される足跡を確認した。他の 7 箇所は全て単独行動をしているヒグマの足跡であった。前掌幅のサイズは 10.0～18.0cm であった。1 回目の調査時には確認されなかった雄成獣クラスのヒグマと推測される 16.0～18.0cm のサイズが足跡 3 箇所で確認された。確認された場所は、知床五湖の山側からカムイワッカ川までの広い範囲で確認された（図 1-12）。

表 1-17. ヒグマの足跡を発見した位置、頭数、及び前掌幅サイズ

調査日	地点番号	位置		頭数	前掌幅	備考
		緯度	経度			
11/19	1	44°08′ 31.04″	145°06′ 41.63″	1	13.0cm	
	2	44°09′ 13.20″	145°07′ 26.41″	1	15.0cm	
	3	44°09′ 29.94″	145°07′ 37.60″	1	14.5cm	
	4	44°09′ 34.87″	145°07′ 42.78″	1	12.5cm	
	5	44°09′ 33.54″	145°07′ 50.98″	1	13.0cm	
11/29	1	44°07′ 19.92″	145°05′ 31.45″	2	13.0cm、子10.0cm	子1頭連れ親子
	2	44°07′ 55.30″	145°06′ 08.13″	1	18.0cm	
	3	44°08′ 32.55″	145°06′ 42.92″	1	16.0cm	
	4	44°08′ 36.99″	145°06′ 57.83″	1	18.0cm	
	5	44°08′ 39.88″	145°07′ 09.44″	1	15.0cm	
	6	44°08′ 50.14″	145°07′ 04.39″	1	14.0cm	
	7	44°09′ 10.41″	145°07′ 14.17″	1	15.0cm	
	8	44°09′ 14.12″	145°07′ 43.83″	1	12.0cm	



図 1-11. 1 回目の調査時においてヒグマの足跡を確認した位置

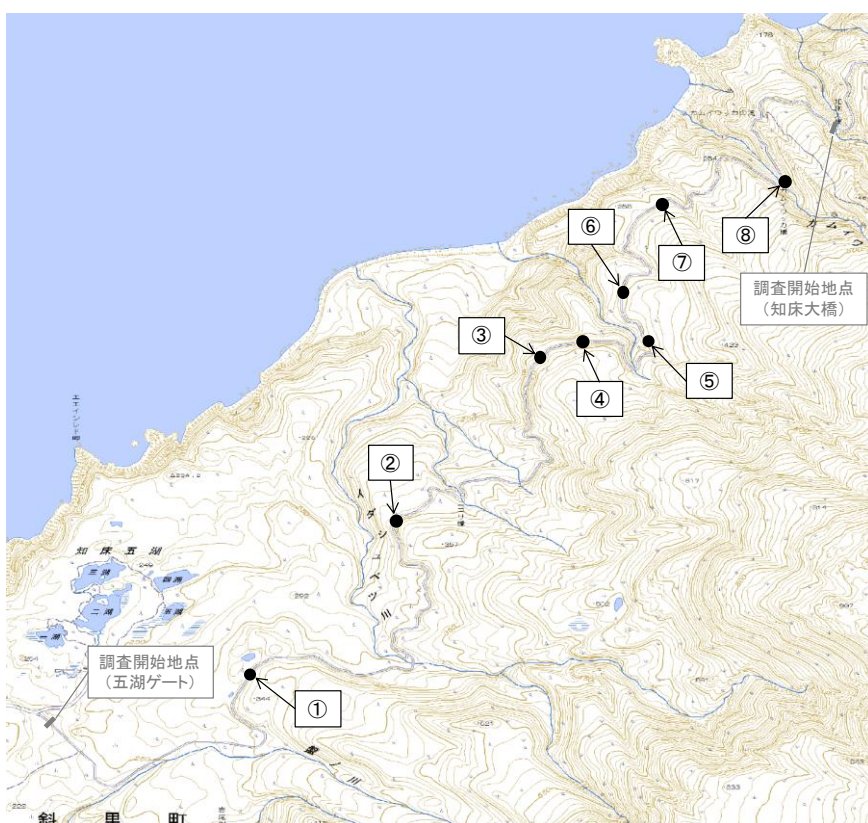


図 1-12. 2 回目の調査時においてヒグマの足跡を確認した位置

○まとめ

今回実施した調査の結果から、足跡によってある程度ヒグマ個体の判別（単独、親子、亜成獣、オス成獣）ができると考えられた。特に親子の場合、足跡の条件が良ければ子の頭数と年齢（0歳か1歳）を判別することが可能と考えられた。

知床半島ヒグマ保護管理方針においてメス成獣の個体数増減の動向を把握することが非常に重要である。今回実施した方法では、親子の組数がある程度把握でき、モニタリングを継続すれば親子の増減の把握に役立つデータが得られると考えられる。ただし単独個体では足跡のサイズのみでの判別は難しい。そのためこのエリアに生息するヒグマのうち何%程度が親子か、という数値は算出できないであろう。そのためには足跡によるモニタリングのみではなく別の手法と組み合わせる方法が考えられる。以下に継続的に実施可能と考えられる手法を列挙する。

■センサーカメラを用いた調査

映像で記録すれば個体の判別はさらに詳細に可能であると考えられる。ヒグマには胸に特徴的な斑紋（月の輪模様）を持つ個体があり、個体識別を行うにあたって有効である。また親子であれば親の斑紋や子供の斑紋、子供の頭数と体格の組み合わせによって細かい判別が可能と考えられる。センサーカメラのみで個体数の推定は難しいが、特定のエリアにおいて継続した記録を行えば親子の出現率や連れている子の頭数の平均などから、年毎のヒグマの繁殖に関する傾向を把握できると考えられる。

ヒグマを効率的に撮影するには餌などでヒグマを誘引する方法があるが、ヒグマの生態への影響や管理の手間を考慮すると餌を使った方法はリスクやコストが大きい。しかしただセンサーカメラを設置するだけではエゾシカやキツネなど他の動物が撮影される可能性が高い。そのため自然状態でヒグマが採食場所とする箇所を選定し、センサーカメラを設置する方法が効率的と考えられる。ヒグマは季節的に植物（ミズバショウ）、昆虫（セミの幼虫）、サケ科魚類（カラフトマス、シロザケ）などを採食することから、カメラの設置場所も季節に応じて変える必要がある。以下に具体的な場所と設置時期を列挙する。

- ・ 知床五湖のミズバショウ群落：5～6月
- ・ 幌別 - 岩尾別開拓跡地のカラマツ林下：6～7月（セミ）
- ・ 幌別川と岩尾別川流域：8～11月（サケ・マス）

年毎に多少の豊凶はあるが、以上がヒグマにとって比較的安定した採食場所と判断される。場所と期間をある程度限定できるためセンサーカメラの設置場所に適していると考えられる。

■ヘア・トラップ法を用いた調査

ヘア・トラップ法はヒグマの毛根からDNAを抽出・分析することで個体識別する手法である。特定の場所に有刺鉄線などを設置し、ヒグマが有刺鉄線を通じた後に残った体毛を採取しサンプルとする。この手法は正確に個体を識別できるがトラップの管理やサンプルの分析にコストがかかる。この手法を実施するとすれば、前述したヒグマの採食場所やその場所に至る獣道に有刺鉄線を設置することで効率的にサンプルを採取できると考えら

れる。またセンサーカメラの調査と併用することで個体サイズや親子の構成などの詳細なデータが得られると考えられる。

■定期的な直接観察による調査

通常ヒグマを目視する機会は少なく、直接観察は難しい。しかし知床半島の先端部では、船からであれば比較的 direct 観察できる機会が多い。後述する観光船からのヒグマ目撃記録では、1回の運航で平均2組以上のヒグマを目撃している。定期的に船からの直接観察を実施することで、単体個体と親子連れの比率や子供の頭数、子供の年齢からヒグマの繁殖状況を把握できると考えられる。

■アンケートによる調査

アンケートによるヒグマ目撃情報の収集は現在も実施中である。しかしアンケートでは場所や時間、個体のサイズ、親子の構成などの情報の正確さにばらつきがある。近年 GPS 機能の付いたカメラや携帯電話が普及し、写真に撮影時間と位置情報を添付できるようになっている。これらの機器で撮影したヒグマの写真の提供を受けられれば、より有効なデータとなるであろう。もし一般からインターネットを通じてこれらのヒグマの写真を投稿してもらえそうなシステムが構築されれば、個体群動態の把握に資するデータを収集できると考えられる。

■自然死亡個体の把握

現在、北海道では狩猟や有害捕獲によるヒグマの人為的死亡個体の情報は行政に報告され、統計される体制となっている。一方で自然死亡個体については報告の対象とならず、ほとんど把握されていない。知床においてもヒグマの自然死亡個体が確認されることは非常に稀であるが、今年度は自然死亡個体が複数確認された。ヒグマ個体群の動向を把握する上で、自然死亡個体の情報を収集することは非常に重要である。そのため今後も人為的死亡個体に加えて自然死亡個体のサンプルも収集し分析する体制が必要である。具体的に自然死亡個体を見つける確実な方法はないが、アンケート等の別の調査で情報を収集できると考えられる。

2-2. 平成24年における観光船からのヒグマ目撃記録

知床におけるヒグマ個体群の動向を把握するため、平成24年における観光船からのヒグマ目撃件数を取りまとめた。

○観光船とヒグマについて

知床半島の斜里側では400トンクラスの大型観光船（1社2隻）とクルーザー型の小型観光船（6社9隻）が4月から11月の間運行している。なかでも海岸の近くを航行できる小型観光船ではヒグマ観察が主要な目的の一つとなっており、特にカムイワッカ以北の海岸では高い確率でヒグマを目撃することができることから観光客の人気の高い。小型観光船運営会社の1社は、運行中に目撃されたヒグマの情報を詳細に記録している。本章では同社から提供された平成24年のヒグマの目撃記録を集計した。

同社の小型観光船の運行期間はコースによって異なるが、最も期間が長いもので4月中旬から11月中旬まで運行している（表1-18、図1-13）。また海況や予約状況によっても運行期間や時間が変化する。

表1-18. 観光船の運航状況

	硫黄山コース	知床岬コース	ヒグマコース
運行期間	4/15-11/15	6/1-10/12※	6/1-9/25※
所要時間	約1時間	約3時間	約2時間
一日の運航数※※	4	2	2
出港時間	8:15	9:30	8:30
	11:00	13:15	15:30
	14:15		
	16:30		

※運行期間外でも予約状況によって臨時便を追加運航

※※予約状況によって臨時便を追加運航



図1-13. 観光船コース

○集計結果

集計結果を表 1-19 に示す。観光船の運航回数は計 1,041 回で、のべ 2,389 組のヒグマが目撃された（子連れヒグマが目撃された場合は親子で 1 組として集計した）。一回の運航におけるヒグマの目撃組数は平均 2.3 組であった。平均目撃組数は、硫黄山コースに比べ知床岬コースやヒグマコースの方がすべての月で著しく多かった。これは知床岬コースやヒグマコースが硫黄山コースに比べ航行距離が長いこと、そしてヒグマが目撃されやすいルシヤ地域が航路に入っているためであると考えられた。平均目撃組数を月別とコース別で比較すると、硫黄山コースでは 5 月、知床岬コースでは 7 月、ヒグマコースでは 4 月に最も多く、全コースを合わせた平均目撃組数は 7、8 月に最も多かった。知床岬コースとヒグマコースでは 4 月から 10 月までの期間、平均目撃組数が 2 組以上となり、運航期間を通して高い水準で推移した。

表 1-19. 平成 24 年における観光船の運航回数とヒグマ目撃組数

コース名		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	期間合計
硫黄山	運航回数(a)	18	50	100	118	131	118	48	7	590
	ヒグマ目撃組数(b)	16	96	110	59	65	53	23	4	426
	平均目撃組数(b/a)	0.9	1.9	1.1	0.5	0.5	0.4	0.5	0.6	0.7
知床岬	運航回数(a)	6	8	50	56	67	54	15	—	256
	ヒグマ目撃組数(b)	26	44	168	318	297	229	51	—	1,133
	平均目撃組数(b/a)	4.3	5.5	3.4	5.7	4.4	4.2	3.4	—	4.4
ヒグマ	運航回数(a)	2	12	26	39	66	42	8	—	195
	ヒグマ目撃組数(b)	12	38	93	181	312	176	18	—	830
	平均目撃組数(b/a)	6.0	3.2	3.6	4.6	4.7	4.2	2.3	—	4.3
計	運航回数(a)	26	70	176	213	264	214	71	7	1041
	ヒグマ目撃組数(b)	54	178	371	558	674	458	92	4	2,389
	平均目撃組数(b/a)	2.1	2.5	2.1	2.6	2.6	2.1	1.3	0.6	2.3

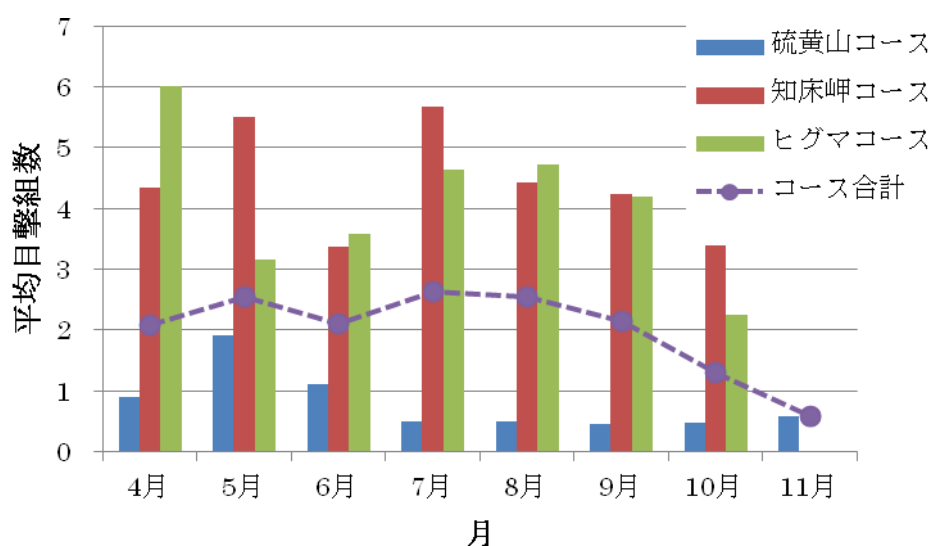


図 14. 平成 24 年における平均ヒグマ目撃組数の月毎の推移

目撃されたヒグマを構成別（単体か親子）に集計したのが表 1-20 である。目撃されたヒグマのうち親子の目撃組数は各コースとも全体の 3 割以上（32～38%）を占めた。月別に見ると 5 月は各コースとも単体より親子の目撃が多かった。6 月は単体と親子の目撃組数が同程度であったが、8 月以降は単体に対して親子の目撃組数が著しく少なくなり、硫黄山コースでは親子の目撃がほとんどなくなった。この傾向は子グマの親離れや、子グマの自然死亡と関連している可能性がある。今年度のデータだけでは判断できないが、観光船からの目撃情報を経年的に比較すればヒグマの繁殖状況や子グマの死亡状況をある程度把握することができると考えられた。

表 1-20. コース別のヒグマ目撃組数とヒグマの構成内訳

月	硫黄山コース				ヒグマウォッチングコース				知床岬コース			
	運航 回数	目撃組数			運航 回数	目撃組数			運航 回数	目撃組数		
		単体	親子	合計		単体	親子	合計		単体	親子	合計
4月	18	9	7	16	2	7	5	12	6	13	13	26
5月	50	30	66	96	12	10	28	38	8	15	29	44
6月	100	57	53	110	26	42	51	93	50	92	76	168
7月	118	48	11	59	39	92	89	181	56	165	153	318
8月	131	65	0	65	66	210	102	312	67	231	66	297
9月	118	52	1	53	42	139	37	176	54	185	44	229
10月	48	23	0	23	8	16	2	18	15	46	5	51
11月	7	4	0	4	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	590	288	138	426	195	516	314	830	256	747	386	1,133

Ⅱ. その他の自然保護業務補佐

1. 傷病鳥獣の保護

観光客や地域住民から傷病鳥獣に関する通報や持ち込みがあった場合、随時個体の保護または回収作業を行った。なお、本業務は斜里町および羅臼町からそれぞれ受託している自然環境保護対策業務（国立公園や鳥獣保護区の区域外も含む）とも連携して実施した。

平成24年4月～平成25年3月20日までの知床国立公園内および国指定知床鳥獣保護区内における傷病鳥獣の保護件数は、斜里町で13種18件、羅臼町では9種15件の33件であった（表2-1）。

斜里町側で保護した鳥獣の内最も多かったものはエゾシカ、オオセグロカモメ、エゾフクロウでそれぞれ2件であった。その他はアマツバメ、ドバト、シメ、ハシブトガラス、ゴジュウカラ、ギンザンマシコ、ハシボソミズナギドリ、ハシブトウミガラス、フルマカモメ、オジロワシの鳥類が各1件であった。また保護に至らなかった事例がエゾシカとオジロワシで各1件あった。

エゾシカ2件の保護理由は、衰弱と交通事故による負傷であった。衰弱していた個体については保護収容後死亡、交通事故によって負傷した個体については保護後放獣した。保護に至らなかった個体はネットに羅網していたもので、保護のため職員が近づいたところ網を破って逃走した。

鳥類の保護理由は衰弱が最も多く5件、次いで交通事故による負傷が4件、窓への衝突が2件であった。他は羅網、釣針の誤飲、海で溺れていた事例が各1件あった。交通事故が原因で保護されたエゾフクロウ、ハシブトガラス、オオセグロカモメはすべて経過観察中に死亡した。その他の9件はいずれも保護後放鳥した。海で溺れていたオジロワシについては、保護した後環境省へ引き渡した。保護に至らなかったオジロワシについては、観察中に飛び立ったため保護の必要はないと判断した。

斜里町の国立公園および国指定鳥獣保護区内で保護のため対応した希少種は、オジロワシのみであった。

羅臼町側で保護した鳥獣は、エゾシカが4件、エゾタヌキが4件、キタキツネ、オオワシ、コマドリ、ドバト、アマツバメ、コサメビタキ、ハシブトガラが各1件であった。ただし、5月18日のドバトは保護せず現場で経過観察したのみであり、6月11日のエゾシカおよび7月5日のキタキツネについては、当該個体の発見には至らなかった。エゾシカへの対応については、発見に至らなかった1件を除き、いずれも野生復帰困難と判断されたため、薬物での安



写真 2-1. 相泊で保護されたオオワシ

楽死処置または通電による殺処分とした。エゾタヌキについてはすべて放獣しており、4 件中 3 件が衰弱個体で、残り 1 件がアライグマ捕獲を目的とした箱罠で錯誤捕獲された個体であった。

羅臼町側の国立公園および国指定知床鳥獣保護区内で保護のため対応した希少種は、5 月 8 日に相泊で腹部を損傷し衰弱していたオオワシのみであった（写真 2-1）。知床財団職員と役場職員により保護された当該個体は、羅臼自然保護官事務所に引き渡され、その後、釧路湿原野生生物保護センターまで移送された。

表 2-1. 知床国立公園内および国指定知床鳥獣保護区内における傷病鳥獣の保護状況

【平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月 20 日】

＜斜里町：18件＞				
年月日	動物種	場所	保護理由	処置・経過
H24.4.7	エゾシカ	国道334号 ブユニ岬付近	衰弱	収容後死亡
H24.5.19	アマツバメ	知床横断道路	衰弱	経過観察後放鳥
H24.6.21	エゾシカ	知床横断道路 開拓小屋入口ゲート付近	交通事故による負傷	放獣
H24.4.10	エゾシカ	国道334号 チャシコツカブ付近	羅網	近づくと逃走
H24.5.19	ドバト	ウトロ港	衰弱	経過観察後放鳥
H24.6.4	オオセグロカモメ	ウトロ港	羅網	その場で放鳥
H24.7.2	シメ	ウトロ	衰弱	経過観察後放鳥
H24.9.13	オジロワシ	岩尾別川町道岩尾別温泉道路入口付近	収容せず経過観察	—
H24.9.14	エゾフクロウ	道道知床公園線 五湖ストレート	交通事故	経過観察中に死亡
H24.9.26	エゾフクロウ	道道知床公園線 五湖ストレート	交通事故	経過観察中に死亡
H24.8.19	ハシブトガラス	オシンコシン売店	交通事故	経過観察中に死亡
H24.10.5	ゴジュウカラ	知床世界遺産センター	窓への衝突	経過観察後放鳥
H24.10.9	オオセグロカモメ	ウトロ東	交通事故	収容作業中に死亡
H24.11.13	ギンザンマシコ	知床世界遺産センター	窓への衝突	経過観察後放鳥
H24.12.10	ハシボソミズナギドリ	斜里第一漁組付近道路上	衰弱	経過観察後放鳥
H24.12.17	ハシブトウミガラス	ベレケ川河口	釣針を誤飲	経過観察後放鳥
H25.1.12	オジロワシ	ウトロ港	海で溺れていた	環境省へ引き渡し
H25.1.27	フルマカモメ	知床世界遺産センター	衰弱	経過観察後放鳥
＜羅臼町：15件＞				
年月日	動物種	場所	保護理由	処置・経過
H24.4.8	エゾタヌキ	湯ノ沢町	衰弱	放獣
H24.4.13	エゾシカ	海岸町	ヒグマ被害	殺処分
H24.4.30	エゾタヌキ	湯ノ沢町	衰弱	放獣
H24.5.8	オオワシ	相泊	衰弱	他施設へ移送
H24.5.13	コマドリ	北浜	衰弱	経過観察中に死亡
H24.5.16	エゾタヌキ	岬町	衰弱	放獣
H24.5.18	ドバト	知床横断道路	傷病疑い	歩いて移動
H24.5.20	アマツバメ	知床横断道路	衰弱	放鳥
H24.5.27	エゾタヌキ	共栄町	錯誤捕獲	放獣
H24.6.11	エゾシカ	知床横断道路	新生児孤立	発見なし
H24.7.5	キタキツネ	知床横断道路	交通事故	発見なし
H24.8.27	コサメビタキ	北浜	衰弱	放鳥
H24.9.25	エゾシカ	相泊	羅網	殺処分
H24.9.29	ハシブトガラ	北浜	バードストライク	放鳥
H25.3.3	エゾシカ	共栄町	傷病	安楽死

斜里町側では、エゾシカが最も多く 23 件、次いでエゾタヌキとキタキツネが 2 件と多かった。死亡要因は、哺乳類、鳥類共に交通事故が最も多かった。エゾシカの死亡要因は自然死が最も多く 21 件、他は交通事故と不明が各 1 件であった。また斜里町では海岸に漂着した死因不明の海獣類の対応が



2 件あった。トドはウトロ港三角岩付近に漂流したもので、斜里町役場が回収した。種不明のクジラに関してはオペケブ川付近の海岸に漂着したもので、発見から約 3 日後にはほぼ骨だけになっていた。死体周辺でヒグマの足跡を複数確認したことから、ヒグマが採食したと考えられた。その他の哺乳類はキタキツネ 2 件、エゾタヌキ 1 件が交通事故死（写真 2-2）、エゾタヌキのもう 1 件が自然死であった。鳥類の死体回収は 4 件で、3 件は交通事故、1 件は窓への衝突死であった。

羅臼町側の野生動物死体の回収は 5 件あり、内訳はエゾシカ 2 件、アオジ 2 件およびアザラシ 1 件であった。このうち、4 月 13 日に回収したエゾシカおよび 7 月 8 日に回収したアザラシはヒグマ対応中に回収されており、ヒグマによって捕食または採食されていたことが確認された。また、4 月 28 日に相泊で発見されたエゾシカの死体にはヒグマの食痕は認められなかったが、誘引される恐れが高いため羅臼町役場が行った回収作業を補助した。8 月 26 日および 29 日に回収したアオジの死体は、どちらも羅臼ビジターセンター敷地内で施設の窓ガラスに衝突して死亡したものと推測された。

＜斜里町＞			＜羅臼町＞			
動物種	死因	件数	動物種	死因	件数	
哺乳類	自然死	21	哺乳類	ヒグマによる捕食	1	
エゾシカ	交通事故	1		不明	1	
	不明	1		アザラシ	不明	1
キタキツネ	交通事故	2	鳥類	アオジ	バードストライク	2
エゾタヌキ	自然死	1				
	交通事故	1				
トド	不明	1				
種不明クジラ	不明	1				
鳥類	キビタキ	交通事故	1			
	ハシブトガラス	交通事故	1			
	アマツバメ	交通事故	1			
	ホオジロ	衝突死	1			
小計		33	小計		5	
			総計			38

2. 知床国立公園内全般のパトロール

国立公園内で問題とされる行為が認められた場合、公園利用者に対する指導や看板設置などによる普及活動を行った。具体的事例としては、野生動物に対する餌やりや国立公園内でバーベキューなどを行っていた利用者に対する注意や指導、啓発を行った。また不法投棄されたゴミの回収も行った。

ゴミの不法投棄について

斜里町側で回収されたゴミは生ゴミや空の弁当容器・ペットボトルなど食品に由来するものが多く、9件確認された。なかでも悪質だったのは8月16日に知床公園線で確認した、45ℓゴミ袋1袋分の生ゴミや弁当容器が投棄されていた事例である。この事例ではヒグマが投棄されたゴミを漁っていたとの目撃情報もあることから、詳しくは前項のヒグマ対策業務に記載する。羅臼町側では、パトロール中などに発見したゴミの回収が5件あった。回収したゴミの内容物は、空き缶、食品トレー、割りばし、雑誌等で、中にはカニや卵の殻、野菜の切りくずなど、ヒグマ等の野生動物を誘引してしまう恐れのあるものも確認された(写真2-3)。



写真 2-3. 道路上に散乱したゴミを回収する当財団職員

野生動物への餌やりについて（ヒグマを除く）

本年は斜里町、羅臼町ともに野生動物への餌やりに関する問題事例が多くみられた。

斜里町側では、知床公園線と国道334号知床横断道路で観光客がキタキツネに餌を与えている現場を確認したため、餌付けをしないよう指導した。また同道路でキタキツネがゴミを漁っている所を発見したため、当該個体を追払いゴミの回収を行った。さらに知床公園線では餌をねだるキタキツネによる渋滞が発生していたため、当該個体の追払いを行った。本年は餌をねだるキツネの出没や、それに伴う渋滞が例年より多くみられたため、餌付け禁止パウチや看板を道路沿いに設置した。加えて、道道・国道の道路管理者に働き



写真 2-4 . 餌やり禁止テロップが流れる
道道知床公園線の電光掲示板

かけ、「野生動物への餌やり禁止！」というテロップを国道 334 号幌別橋付近と知床公園線入口付近の道路情報電光掲示板計 2 カ所で掲示することとなった(写真 2-4)。さらに観光施設ではポスターを掲示し、観光客への注意、啓発を推進した。

羅臼町側での問題事例については、羅臼岳登山道の羅臼平で残置してあった登山者のザックがキタキツネに荒らされるといった被害が発生したため、8 月 2 日に食料管理の徹底を呼びかける看板を羅臼側登山口に設置した(写真 2-5)。また 6 月 15 日、7 月 13 日および 8 月 8 日には、パトロール中、餌をねだり車両に近づいてくるキタキツネがいたため追い払いを実施した。7 月 14 日には、餌やり行為を未然に防ぐための看板を知床横断道路沿い 3 箇所に設置した。しかし注意看板を設置した後の 7 月 19 日に、知床横断道路沿いで観光客のものと考えられる車両から、食べ物らしき物がキタキツネに投げ与えられている現場をパトロール中の知床財団職員が目撃、注意しようと近づいたところ、走り去ってしまった。

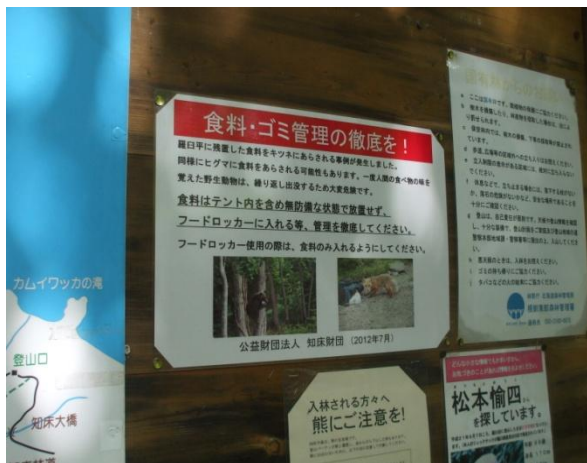


写真 2-5. 登山口の掲示板に設置した食料管理を呼びかける看板

公園利用者への指導について

斜里側では公園利用者による問題行為が 8 月に 3 件確認された。いずれの事例も公園利用者が道路沿いでキャンプやバーベキュー等を行っていたもので、発見時に注意喚起を行った。

羅臼町側では 6 月 2 日に冬期休業中の知床国立公園羅臼温泉野営場にキャンピングカーが駐車しているとの通報が国有林巡視員（グリーンサポートスタッフ）から寄せられたため、現地の管理を担っている羅臼町役場水産商工観光課に連絡するとともに、利用者への指導を行った。野営場の営業は 6 月 15 日からであること、またヒグマと出遭う可能性が高いため食料の管理を徹底するよう注意喚起した。

平成 24 年度 環境省釧路自然環境事務所 請負事業

事業名：平成 24 年度生物多様性の保全と活用による国立公園活性化事業
(グリーンエキスパート)
「知床世界遺産地域における利用の適正化と野生生物との共生推進事業」

事業期間：平成 24 (2012) 年 5 月 14 日～平成 25 (2013 年 3 月 29 日)

事業実施者：公益財団法人 知床財団
〒099-4356 北海道斜里郡斜里町岩尾別 531 知床自然センター内

リサイクル適正の表示：紙へリサイクル可

本冊子は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係わる判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料[A ランク]のみを用いて作製しています。